

西東京稲門会俳句サロン(第186回) 次回 三月十三日(金) 十四時

令和八年二月十三日(金) 十四時 田無公民館 田無公民館

兼題 余寒、鶯 その他計五句 兼題 卒業、花冷え その他計五句

高点句・自薦句一覧

作者(「号」のあいうえお順)

枯野ゆく我に寄り添ふ影ひとつ

◎吉成愚公

春の雪反乱想ふ都かな

石井三舟

うぐいすにふと手を止める朝餉かな

水野瑞泉

一合に二匹の目刺一人酒

桑田青三

田無タワー天辺に月余寒かな

木下石路

禅寺の廊下磨かれ冴返る

○志賀 勉

あたたかや小出の裸婦の臍の影

◎原田尚知

山里の遠鶯に歩を休め

○辻直邦

残る鴨残る人ありこの世にも

金子まさお

竹刀振る老残の日の余寒かな

◎滑志田流牧

人待てば駅の古色よ冴えかへる

富山珠恵

十字きる指先にある余寒かな

◎河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第185回) 次回 二月十三日(金) 十四時

令和八年一月九日(金) 十四時 田無公民館 田無公民館

兼題 一月、初夢 その他計五句 兼題 余寒、鶯 その他計五句

高点句・自薦句一覧

作者(「号」のあいうえお順)

寒夜の灯ゆれて水脈ひく屋形船

◎吉成愚公

年用意し待つ母の顔車窓かな

石井三舟

楠木のシャワーを浴びて年新た

水野瑞泉

初夢やというほどの夢でもなし

桑田青三

初夢に非核三原則祈りをり

木下石路

雑煮餅小さく切りて母の椀

志賀 勉

去年今年なだめすかして親不知齒

○原田尚知

初夢や厨の煮炊き母に会ふ

辻 邦彩

一月や馬齢重ねて九十年

◎金子まさお

一月や光陰交じる灘の色

滑志田流牧

寒晴れや素数きりりと美しく

○富山珠恵

みちのくへ芭蕉のお供夢はじめ

○河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第184回) 次回 一月九日(金) 十四時

令和七年十二月十二日(金) 十四時 田無公民館 フレンドリー

兼題 年忘れ、冬薔薇 その他計五句 兼題 一月、初夢 その他計五句

高点句・自薦句一覧

作者(「号」のあいうえお順)

枯れ葎建つは老人ホームらし 吉成愚公

黙々と氷雨の中に孤影あり 石井三舟

戦争を知らず八十とし忘れ 水野瑞泉

路地裏や茶房の小窓冬の薔薇 桑田青三

身にしむやはだしのゲンの漫画読む 木下石路

石路の花寂れし宿を明るうす 志賀 勉

ダイアナの影ほのとあり冬薔薇 ◎原田尚知

生牡蠣の潮の香り喉通る 辻 邦彩

青春の記憶にも棘冬薔薇 ○金子まさお

つぶやきは木枯しに飛び隅田川 滑志田流牧

明暗を途中で眠る炬燵かな 富山珠恵

冬薔薇凜と卒寿の修道女 河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第183回)

次回 十二月十二日(金) 十四時

令和七年十一月十四日(金) 十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 返り花、時雨 その他計五句

兼題 年忘れ、冬薔薇 その他計五句

高点句・自薦句一覧

作者(「号」のあいうえお順)

山裾にともる一灯夕時雨

○吉成愚公

山頭火偲びて歩く時雨かな

石井三舟

埋めつくす葉の上歩く時雨かな

水野瑞泉

小春日や遺影はすでに決めてあり

桑田青三

遊ゴロの併殺プレイや登高す

木下石路

紅葉散る沢に鐘の音寒山寺

志賀 勉

その碧を掬へば消えて湖は秋

○原田尚知

煮返しのおでん色増し冷酒汲む

辻 邦彩

冷え冷えとシャッター降りて書肆ありき

◎金子まさお

ひよとこの面吾に似る返り花

滑志田流牧

返り花ひとつ拾ひて今日よき日

富山珠恵

晩節を謳歌するべし返り花

河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第182回) 次回 十一月十四日(金) 十四時

令和七年十月十日(金) 十四時 田無公民館 田無公民館

兼題 菊人形、秋刀魚 その他 兼題 返り花、時雨 その他計五句

高点句・自薦句一覧

作者(「号」のあいうえお順)

敵味方どちらも薫る菊人形 吉成愚公

懐メロを聴き飽きている夜長かな 石井三舟

燻製になるやサンマの煙かな 水野瑞泉

白雲の裾野流れる蕎麦の花 桑田青三

船頭の多く集まり秋刀魚焼く 木下石路

ふと目覚め夜具を引き上ぐ夜寒かな ○志賀 勉

青空に手をいれ林檎挽ぎにけり ◎原田尚知

銀杏の落つる音にぞ息を呑む 辻 邦彩

菊人形首相候補の鼻尖り 金子まさお

富士の野に戦車軋める音の秋 滑志田流牧

日月に秋刀魚の骨のほそき銀 富山珠恵

爽やかに凱旋門の上に立つ 河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第181回) 次回 十月十日(金) 十四時

令和七年九月十二日(金) 十四時 田無公民館 田無公民館

兼題 銀河、新米計五句 兼題 菊人形、秋刀魚 その他計五句

高点句・自薦句一覧

作者(「号」のあいうえお順)

幾人の積みしケルンや霧の屋根

◎吉成愚公

漢詩集を買わむと思ふ秋はじめ

石井三舟

新米や土鍋にて炊く匂いかな

水野瑞泉

忘れもの捜しているや秋の蝶

桑田青三

木曾路来て星轟々と天の川

木下石路

追ひ駆けて間に合わぬバス秋暑し

志賀 勉

流灯やひかりを星へ只見川

原田尚知

軒下に吊す玉葱夕日浴ぶ

辻 邦彩

先逝きし友を指折り星月夜

金子まさお

銀漢へ一献捧ぐ瑠璃の盃

滑志田流牧

友乗るや賢治の汽車が銀河ゆく

○富山珠恵

西東京稲門会俳句サロン(第180回) 次回 九月十二日(金) 十四時

令和七年七月十一日(金) 十三時 柳沢公民館 田無公民館

兼題なし(東伏見公園など周辺を吟行) 兼題 銀河、新米 その他五句

高点句・自薦句一覧

作者(「号」のあいうえお順)

風死して千本鳥居異界めく ◎吉成愚公

縄文の壺に残るか夏の空 石井三舟

アスファルト割れ目一本姫女苑 桑田青三

よりかからず旧家尋ねて夏の坂 木下石路

梅雨出水濁れる池を鯉巡る 志賀 勉

翡翠や次の橋へと波立てて 原田尚知

縄文の遺跡にロマン百日紅 辻 邦彩

梅雨空に稲荷の鳥居朱を重ね 金子まさお

埋め戻す縄文の丘青薄 ○滑志田流牧

筆塚に彫られし由緒晩夏光 河村洋子

西東京稲門俳句サロン(第179回)

次回 七月十一日(金) 十三時

令和七年六月十三日(金) 十四時 田無公民館

柳沢公民館

吟行

兼題 汗、百日紅 その他計五句

高点句・自薦句一覧

作者(「号」のあいうえお順)

吉成愚公

「ごめんね」と遺影に幾度梅雨寒し

○石井三舟

雨音を傘に聞きつつ梅雨散歩

◎桑田青三

添い遂げて六十年や苔の花

木下石路

踊り子の汗を飛ばして身をそらし

志賀 勉

悶々と寝返り重ね明け易し

水野瑞泉

百日紅きみは炎天が良く似合う

原田尚知

草刈りの蚊を打たぬ父蚊は刺さぬ

辻 邦彩

ミスターの汗ほとばしる空振りぞ

金子まさお

フラメンコ裾翻し汗しとど

滑志田流牧

青刈りの汗の空しき過疎の村

富山珠恵

まぼろしや吾は一夜の蛍かな

河村洋子

広島は遠き日ならず百日紅

西東京稲門俳句サロン(第178回)

次回 六月十三日(金) 十四時

令和七年五月九日(金) 十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 鮎、葉桜 その他計五句

兼題 汗、百日紅 その他計五句

高点句・自薦句一覧

作者(「号」のあいうえお順)

目には青葉胸には闇の続く日々

◎吉成愚公

鮎酒を微妙と言ひて残す奴

石井三舟

葉桜や二か月振りの髪を切る

○桑田青三

那珂川の鮎解禁や魚籠一杯

木下石路

退院の母の爪切る晩の春

志賀 勉

遠くまで竿が交互にアユ解禁

水野瑞泉

花の夜や曲がり忘れてより迷ふ

○原田尚知

新緑の棚田に丘の風そよぐ

辻 邦彩

ぼうたんや夫婦別姓赤と白

◎金子まさお

点となり雪嶺に消ゆ紋黄蝶

滑志田流牧

つばくらめ喉やはらかき軒端かな

○富山珠恵

西東京稲門俳句サロン(第177回)

次回 五月九日(金) 十四時

令和七年四月十一日(金) 十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 百千鳥、桜餅 その他計五句

兼題 鮎、葉桜 その他計五句

高点句・自薦句一覧

作者(「号」のあいうえお順)

百千鳥塙(ねぐら)は千年大楠樹

◎吉成愚公

一杯の珈琲前に花疲れ

◎石井三舟

孫は剥ぎ婆はそのまま桜餅

◎桑田青三

香り立つ引越挨拶桜餅

◎木下石路

一羽鳴きたちまち森は百千鳥

◎志賀 勉

桜にはぎゆつと冷やしたロゼワイン

原田尚知

部活終へ孫は春眠欲しいまま

◎辻 邦彩

燕飛ぶ縄文遺跡の茅葺きに

◎金子まさお

水源の神の目覚めや山笑ふ

◎滑志田流牧

染みひとつ残して死にき雀の子

◎富山珠恵

白米に白麦を足す受難節

河村洋子

西東京稲門俳句サロン(第176回)

次回 四月十一日(金) 十四時

令和七年三月十四日(金) 十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 長閑、椿 その他計五句

兼題 百千鳥、桜餅 その他計五句

高点句・自薦句一覧

作者(「号」のあいうえお順)

由布島へ牛渡りゆく海のどか

○吉成愚公

頬かろく撫でてゆきけり春の風

○石井三舟

長閑さやたゆたう波に釣り忘れ

水野瑞泉

神許せあまりに小さき蜆をば

桑田青三

雛飾りメールで元気確認す

木下石路

やはらかき春の雪なり淡と消へ

志賀 勉

荷ほどけば伽藍の香かすか京雛

○原田尚知

椿落つ天向く薬や揃ひたる

◎辻 邦彩

春風のそよと吹寄せ芭蕉庵

金子まさお

山火事も一息入れよ牡丹雪

◎滑志田流牧

床の間の椿一花が部屋を統ぶ

富山珠恵

西東京稲門会俳句サロン(第175回)

次回 三月十四日(金) 十四時

令和七年二月十四日(金) 十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 余寒、露の臺 その他計五句

兼題 長閑、椿 その他計五句

高点句・自薦句一覧

作者(「号」のあいうえお順)

手土産に添えし一句と露の臺

吉成愚公

春めいてキャッチボールの親子かな

石井三舟

ほろ苦き若き日もあり露の臺

○水野瑞泉

オムライス背中開けば春どっと

桑田青三

おだやかな気分の中の日向ぼこ

木下石路

水温む鯉反転の泥けむり

志賀 勉

議事堂の影歪なる余寒かな

原田尚知

甘き香に顔近付くる梅見かな

辻 邦彩

松葉散る米寿の句友冬天に

◎金子まさお

溪の音辿り来たれば露の臺

滑志田流牧

お喋りな露の臺たち咲きつどふ

富山珠恵

一切の色を奪いて春の雪

○河村洋子

西東京稲門会俳句サロン (第174回) 次回 二月十四日 (金) 十四時

令和七年一月十日 (金) 十四時 田無公民館 田無公民館

兼題 成人式、七草 他計五句 兼題 余寒、露の臺 その他計五句

高点句・自薦句一覧

作者 (「号」のあいうえお順)

余生などとまだ言ふまいぞ老の春

◎吉成愚公

数の子が二切れ残り子ら帰る

○石井三舟

七草を土鍋ごとごと傘寿かな

水野瑞泉

底冷えや銀座横文字ばかりなり

桑田青三

水田より掘り出し慈姑懐かしく

木下石路

神官の袴の白さ淑気かな

志賀 勉

アルプスに富士の影あり初景色

○原田尚知

成人式馴れぬ晴れ着に笑み固し

○辻 邦彩

七草を探しあぐねて保谷田無

金子まさお

白菜に富士積み揚ぐる初荷札

滑志田流牧

成人式古き真珠を女の孫に

富山珠恵

荒波と語る岬の野水仙

○河村洋子

西東京稲門会俳句サロン (第173回)

次回 一月十日 (金) 十四時

令和六年十二月十三日 (金) 十四時半 田無公民館

田無公民館

兼題 牡蠣、日向ぼこ 他計五句

兼題 成人式、七草その他計五句

高句句・自薦句一覧

作者 (「号」のあいうえお順)

紺碧の空へ拳やラガーメン

吉成愚公

老人は想い出ばかり日向ぼこ

石井三舟

暮れゆくも太陽追って日向ぼこ

水野瑞泉

短日や余生ますます気忙しき

○桑田青三

ヒダンキョウ遺恨乗り越え鶴の像

木下石路

取り落とす本に目覚めし日向ぼこ

◎志賀 勉

ぷりぷりの厚き生牡蠣巴里左岸

原田尚知

焼牡蠣のトング片手に赤ワイン

辻 邦彩

船底の牡蠣マラッカを巡り来て

○金子まさお

船底に津波の記憶牡蠣を剥く

○滑志田流牧

鮫鱈の歯を剥き出して吊られをり

○富山珠恵

西東京稲門会俳句サロン (第172回) 次回 十二月十三日 (金) 十四時半

令和六年十一月八日 (金) 十四時 田無公民館 田無公民館

兼題 大根、冬隣 他計5句 兼題 牡蠣、日向ぼこ 他計5句

高点句・自薦句一覧

作者 (「号」のあいうえお順)

亡き父の蔵書そのまま冬に入る

吉成愚公

石狩の挽歌の歌碑に夕時雨

石井三舟

古民家や干し大根の砦かな

水野瑞泉

冬の月秘密すべてを見透かされ

○桑田青三

秋蝶や何処へ跳んで去りゆくか

木下石路

大根煮る妻は何度も串を刺し

志賀 勉

ぼやぼやの埴輪の眼冬隣

原田尚知

楽しみはとろり濃いめの蕎麦湯かな

辻 邦彩

忘れたいことそのままに冬に入る

金子まさお

つかみ抜く大根の葉の青さかな

滑志田流牧

木の実ふる遠野は謎の多き里

◎河村洋子

西東京稲門会俳句サロン (第171回)

次回 十一月八日(金) 十四時

令和六年十月十一日(金) 十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 秋澄む、 菊一切 他計5句

兼題 大根、冬隣 他計5句

高点句・自薦句一覧

(作者〔「号」のあいうえお順)

苔むせる遊女の墓や虫の闇

吉成愚公

空と海潮の香もあり秋遍路

石井三舟

見えを切る菊人形の役者かな

水野瑞泉

吾が弔い菊一本あればよし

桑田青三

ただならぬ世界の動き逝く秋よ

木下石路

秋の雲ちぎれ自在に容変へ

志賀 勉

秋霖や坂くだりゆき小石川

原田尚知

丸干しを炙り会津の温め酒

◎辻 邦彩

休耕田手持ち無沙汰の案山子かな

○金子まさお

かもしかの瞳の奥や水澄める

滑志田流牧

お見合いはうまく行きそう菊日和

河村洋子

西東京稲門会俳句サロン（第170回）

次回 十月十一日（金）十四時

令和六年九月十三日（金）十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 台風、太刀魚 他計5句

兼題 秋澄む、菊一切 その他計五句

作者（「号」のあいうえお順）

高点句・自薦句一覧

つくづくと非力な我等原爆忌

◎吉成愚公

秋の日や買ってしまえば読まぬ本

石井三舟

太刀魚の煮てよみがえる母の味

水野瑞泉

台風の進路ひやひや旅支度

○桑田青三

気に入りの書店の閉鎖秋の蝉

◎木下石路

太刀魚の群れてゆらゆら立ち泳ぎ

志賀 勉

野分朝クレープ焼いて小さき渦

○原田尚知

紀州行く太刀魚寿司の透きとほる

○辻 邦彩

米をとぐ独りに慣れし秋の夕

○金子まさお

天気図の二百十日の渦重し

滑志田流牧

二段組みの小活字本秋あつし

河村洋子

西東京稲門会俳句サロン (第169回)

次回 九月十三日 (金) 十四時

令和六年七月十二日 (金) 十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 金魚、夕焼 他計5句

兼題 台風、太刀魚 その他計五句

作者 (「号」のあいうえお順)

高点句・自薦句一覧

睦言も諍ひも聞く金魚かな

吉成愚公

鴨の子や急ぐわ急ぐ親の後

石井三舟

この世をば遊んで還る夕焼かな

水野瑞泉

金魚玉水の惑星濁りなし

桑田青三

遙かなる友に会いたし夏帽子

木下石路

クルーザー呑み込む如き大夕焼

志賀 勉

大夕焼ゴンドラ揺るる窓掃除

◎原田尚知

梔子の花そつと咲く裏戸口

辻 邦彩

草を刈るボランティア皆髪白し

金子まさお

病床の窓辺を過ぐる金魚売

滑志田流牧

モネの絵の女となりて白日傘

○河村洋子

西東京稲門会俳句サロン（第168回）

次回 七月十二日（金）十四時

令和六年六月十四日（金）十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 五月晴、蝸牛 他計5句

兼題 金魚、夕焼 その他計五句

作者（「号」のあいうえお順）

黙といふ雄弁もあり蝸牛

◎吉成愚公

女王も伯爵もいるバラ園に

○石井三舟

かたつむり我も軌跡を残したし

○水野瑞泉

羽田着並びて見上ぐ河鵜かな

○桑田青三

降水帯過ぎてつかの間五月晴

木下石路

江の電の去りし静寂や夏の蝶

◎志賀 勉

嘶きが雲をけちらし野馬祭

◎原田尚知

梅雨晴れ間青空写す棚田かな

◎辻 邦彩

雨男でんでんむしを手のひらに

金子まさお

手に乗せて海の音聴く蝸牛

◎滑志田流牧

頭出せ遠流の島のかたつむり

○河村洋子

西東京稲門会俳句サロン（第167回）

次回 六月十四日（金）十四時

令和六年五月十日（金）十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 筍、新緑 他計5句

兼題 五月晴、蝸牛 他計5句

高点句・自薦句一覧

作者（「号」のあいうえお順）

鯉幟竿しなりたり子沢山

○桑田青三

初筍眠る赤子のやうに抱き

○吉成愚公

筍に負けぬ力を我白寿

○石井三舟

新緑の谷間に響く法螺の音

○水野瑞泉

青き踏むステప్పインのスニーカー

○木下石路

行間に母への思ひ麦の秋

小嶋長閑

若葉風パン焼く朝の香り乗せ

志賀 勉

歯磨き粉ビュツととびだし夏来る

○原田尚知

正座して家宝の碗に新茶かな

○辻 邦彩

我ひとり筍飯を二合炊く

○金子まさお

底力出しきり牡丹崩れたる

◎河村洋子

新緑にまばゆきセーラー服の列

滑志田流牧

西東京稲門会俳句サロン（第166回）

次回 五月十日（金） 十四時

令和六年四月十二日（金） 十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 春愁、連翹 他計5句

兼題 筍、新緑 他計5句

高点句・自薦句一覧

作者（「号」のあいうえお順）

連翹の花小刻みに風抜ける

○桑田青三

連翹の奥や世捨ての栖む庵

○吉成愚公

逍遙の歌碑建つ丘に春憂ひ

石井三舟

春愁や池面に揺るる五重の塔

水野瑞泉

連翹や黄色の花弁重ね咲き

木下石路

我生きる君も生きるや蛩烏賊

小嶋長閑

賑わいの中にふとある春愁

志賀 勉

朝刊に微かな香り沈丁花

◎原田尚知

春愁やベンチに文庫うたた寝す

辻 邦彩

はくもくれん皆天をむき空を吸ふ

金子まさお

ふるさとへ蕪村還らぬ菜種梅雨

滑志田流牧

西東京稲門会俳句サロン（第165回）

次回 四月十二日（金）十四時

令和六年三月八日（金）十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 白魚、啓蟄 他計5句

兼題 春秋、連翹 他計5句

高点句・自薦句一覧

作者（「号」のあいうえお順）

朧夜や母の歌ひし「支那の夜」

桑田青三

被ひたき穢れ誰にも流し雛

◎吉成愚公

山頭火開けば遍路旅心

石井三舟

啓蟄や虫うごめきて薦外し

水野瑞泉

啓蟄や地下の小さな映画館

木下石路

啓蟄や舟動き出す能登輪島

小嶋長閑

千年雛階（きざはし）ごとに競ひけり

志賀 勉

啓蟄や泥まみれなる吾子の指

原田尚知

停戦を願ひ異国へ吊し雛

辻 邦彩

鳥帰る拉致されし人そのままに

○金子まさお

水はじく紅の一滴寒椿

滑志田流牧

白魚の黒き目にある憂ひかな

○河村洋子

西東京稲門会俳句サロン（第164回）

次回 三月八日（金）十四時

令和六年二月九日（金）十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 春浅し、鶯 他計5句

兼題 白魚、啓蟄 他計5句

高点句・自薦句一覧

作者（「号」のあいうえお順）

静寂に成就したるや猫の恋

桑田青三

病窓を開けて確かむ初音かな

吉成愚公

銚子手に故郷（ふるさと）遠し春の雪

石井三舟

春浅し復興目指す能登の島

水野瑞泉

うぐいすやまた来て鳴きぬテニスコート

木下石路

春立つやジャズの流れる台所

○小嶋長閑

冴返る警策ひびく座禅堂

志賀 勉

薄氷やきつぱり白き朝の月

原田尚知

白子干す浜の老女の曲がる腰

辻 邦彩

春浅し竜の身ぶるい能登の揺れ

金子まさお

春浅き浅間は空に怒りをり

滑志田流牧

身体中耳にして聴く初音かな

片平るみ

拳玉のぴたりと決まり春立てり

◎河村洋子

西東京稲門会俳句サロン（第163回）

次回 二月九日（金）十四時

令和六年一月十二日（金）十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 初一切、餅 他計5句

兼題 春浅し、鶯 他計5句

高点句・自薦句一覧

作者（「号」のあいうえお順）

病窓へ分け隔てなき初日差

桑田青三

歌会始御題「和」にある祈りかな

吉成愚公

それぞれに雑煮がありて夫婦かな

石井三舟

リハビリの歩く楽しさ初歩き

○水野瑞泉

龍神の長蛇の列や初詣

木下石路

日溜まりの四温日和にうたた寝す

志賀 勉

買初やあを匂ひたつ万年筆

原田尚知

苔庭にそつと散りぬる寒椿

辻 邦彩

初厨母に習いし隠し味

金子まさお

老残のくねりし指や蜜柑剥く

○滑志田流牧

風花の短き命手のひらに

片平るみ

戦火なき国の海原初あかり

◎河村洋子

西東京稲門会俳句サロン（第162回）

次回 一月十二日（金）十四時

令和五年十二月八日（金）十四時 田無公民館

田無公民館

兼題冬麗、ラグビー 他計5句

兼題 初一切、餅 他計5句

高点句・自薦句一覧

作者（「号」のあいうえお順）

生牡蠣や嗣治の裸婦のごとき白

○桑田青三

我が家にも秘伝の具ありおでん鍋

吉成愚公

全集に冬日は移り古書の街

石井三舟

同窓名簿夜明け凍星消えるまで

木下石路

冬うらら舌で転がす金平糖

○小嶋長閑

旅立ちの駅弁選び冬うらら

志賀 勉

冬麗ら巴里の市場に豚の耳

原田尚知

ラグビーの楢円の行方固唾呑む

辻 邦彩

オリオンを彼岸の人と見つめあい

金子まさお

縄文の土偶の傷や鎌いたち

滑志田流牧

冬帽の似合わぬままに老いにけり

◎片平るみ

着ぶくれの行列ジャンボくじ売り場

河村洋子

西東京稲門会俳句サロン（第161回）

次回 十二月八日（金） 十四時

令和五年十一月十日（金） 十四時 田無公民館

田無公民館

兼題牡蠣、酉の市 他計5句

兼題 冬麗、ラグビー 他計5句

高点句・自薦句一覧

作者（「号」のあいうえお順）

冬の月蕙は白き波になり

◎桑田青三

役目終へ案山子と我と空仰ぐ

○吉成愚公

啄木の歌碑に冬日の小樽かな

◎石井三舟

酔牡蠣吸うこの世の別れ如く食む

木下石路

身の丈の熊手に勝る大手締め

◎小嶋長閑

境内の蕎麦屋ひっそり神の留守

志賀 勉

冬草を踏みたる悔の少しあり

○原田尚知

閑かなる古刹の僧や落葉焚

○辻 邦彩

一葉も荷風も下駄で酉の市

◎金子まさお

牡蠣小屋に海が鳴るなり被災の地

◎滑志田流牧

吾の夢も駆け巡りたる枯野かな

○片平るみ

片しぐれ裏表ある京言葉

◎河村洋子

西東京稲門会俳句サロン（第160回）

次回 十一月十日（金） 十四時

令和五年十月十三日（金） 十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 秋祭、新米 他計5句

兼題 牡蠣、酉の市 その他計五句

作者（「号」のあいうえお順）

いつの間に消へたる二人茸狩

吉成愚公

秋の日や青春捨てに古本屋

○石井三舟

盛り過ぎさらに妖しや彼岸花

桑田青三

爽やかやみんなて競う合唱祭

木下石路

秋祭暴れ神輿の女子衆

小嶋長閑

鳥渡る今宵いづこを峙かな

○志賀 勉

緞帳の雲を巻き上げ天の川

原田尚知

银杏散る通わぬ道の吹き溜まり

辻 邦彩

手に手に手ヌマホが踊る秋祭り

金子まさお

新米や友との絆六十人

梶原松葉

金色の海の夜明けを雁渡る

滑志田流牧

もう風の囁きほどの虫の声

◎片平るみ

西東京稲門会俳句サロン（第159回）

次回 十月十三日（金）十四時

令和五年九月八日（金）パソコン句会

田無公民館

兼題 台風、鬼灯 他計5句

兼題 秋祭、新米 他計5句

作者（「号」のあいうえお順）

鬼灯を夢の破れぬやうに揉み

◎吉成愚公

周航の歌碑に淡海の風白し

◎石井三舟

鬼灯をぶじゅっと鳴らす昭和かな

桑田青三

猛暑の高校野球校歌和す

木下石路

大トロの舌に溶けたり秋の雲

小嶋長閑

秋灯の点滅暗き無人駅

志賀 勉

細筆の閉店の文字白芙蓉

原田尚知

台風の備え固めてショパン聴く

辻 邦彩

鬼灯を噛んでしまつてほろ苦く

金子まさお

古民家に夏炉焚きつぐ梁の艶

梶原松葉

夜長なりペンの行方の浮き沈み

滑志田流牧

秋風ややって来るもの帰るもの

○片平るみ

銀の匙で掬つてみたき白露かな

河村洋子

西東京稲門会俳句サロン（第158回）

次回 九月八日（金）十四時

令和五年七月十四日（金）十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 夕焼、夾竹桃 他計5句

兼題 台風、鬼灯 その他計五句

作者（「号」のあいうえお順）

大夕焼ひたすら挑む逆上がり

○吉成愚公

会わないか竹馬の友の暑中見舞い

石井三舟

夕焼けやただ佇みて二月堂

水野瑞泉

真夜中の麦茶一杯八十路かな

桑田青三

夾竹桃花揺れてをり爆心地

木下石路

あの山も吞みて日の射す夕焼かな

小嶋長閑

万物を焼き尽くすごと大夕焼

志賀 勉

ほたるにはほたるの重さ夜の雨

原田尚知

水玉や自在に溢す蓮青葉

辻 邦彩

夕焼けや昭和ひきずる風呂屋閉ず

金子まさお

夕焼けやぐるり盆地の影ひなた

梶原松葉

かみひこうき何度も飛ばす雲の峰

滑志田流牧

夕焼けを一人占めして野の地蔵

◎片平るみ

西東京稲門会俳句サロン（第157回）

次回 七月十四日（金）十四時

令和五年六月九日（金）十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 蛍、夏の山 他計5句

兼題 夕焼、夾竹桃 他計5句

作者（「号」のあいうえお順）

黒南風や深く一礼遭難碑

○吉成愚公

掌の中の蛍放して見上ぐ父子

石井三舟

ケーブルでいつきに拡がる夏の山

水野瑞泉

あれは父あれは母かな蛍の火

○桑田青三

蛍や消息不明の同窓誌

木下石路

せせらぎの闇夜に溶けし蛍かな

○小嶋長閑

夏の山星に眠りて星に起き

○志賀 勉

飛び石の光横切る蜥蜴かな

原田尚知

あぢさゐやそぼ降る雨に色深し

辻 邦彩

まほろばの地を見渡して夏の山

金子まさお

石鱚の残り香仄か梅雨に入る

梶原松葉

たましひの吹かれてをりぬ蛍坂

滑志田流牧

黴くさき父の句集も相続す

○片平るみ

出格子のうるみ初めたる走り梅雨

◎河村洋子

西東京稲門会俳句サロン（第156回）

次回 六月九日（金） 十四時

令和五年五月十二日（金） 十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 更衣、粽 他計5句

兼題 蛭、夏の山 他計5句

作者（「号」のあいうえお順）

牡丹や遊女の墓に荷風の碑

吉成愚公

湧き水や揺れてビールの二三本

石井三舟

ハイヒール音も軽やか衣更え

水野瑞泉

葉桜や座る人なきベンチかな

桑田青三

寒暖差激しくまどう衣更

木下石路

粽結ふ小さくなりし母の背

小嶋長閑

粽とく笹の粘りのもどかしさ

志賀 勉

シンバルの音高らかに牡丹咲く

原田尚知

阿吽像背後を飾る柿若葉

辻 邦彩

衣替え鏡の前で独り言

金子まさお

三代の嫁あいあいと粽結ふ

梶原松葉

島唄や手のひらに乗せ粽結ふ

滑志田流牧

あの角でたぶん振り向く夏帽子

◎片平るみ

この子らの未来かがやけ粽結ふ

○河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第155回)

次回 五月十二日(金) 十四時

令和五年四月十四日(金) 十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 桜一切、遅日 他計5句

兼題 更衣、粽(ちまき) 他計5句

作者(「号」のあいうえお順)

悩みごと有るも生き甲斐飛花落花

吉成愚公

椅子ふたつ今年は一人見る桜

石井三舟

遅き日や座して静かに禅の寺

水野瑞泉

諸葛菜自由自在に風の吹き

桑田青三

死に支度急ぐでないよ涅槃西風

木下石路

ありし日の苦き思ひで辛夷咲く

小嶋長閑

囀りが囀り呼ぶや森の朝

志賀 勉

縞模様のバームクーヘン春の山

原田尚知

遅き日や部活の友の声揃ふ

辻 邦彩

さよならを載せてゆるゆる花筏

◎金子まさお

まだ若きさくら咲き初む樹木葬

梶原松葉

切り株に息のあるらし木の芽風

滑志田流牧

引き出しの一番下にある余寒

◎片平るみ

方言の抜けぬ旧友草の餅

○河村洋子

西東京稲門会俳句サロン（第154回）

次回 四月十四日（金）十四時

令和五年三月十日（金）十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 土筆、踏青 他計5句

兼題 桜一切、遅日 その他計五句

作者（号）のあいごえお順

気にかかるあの子のその後土筆んぼ

◎吉成愚公

青き踏む忘れてしまえ帰り道

石井三舟

日差し浴び川浴いそぞろ青を踏む

水野瑞泉

老梅や曲がりくねりて八十路かな

桑田青三

啓蟄やレターパックの風便り

木下石路

病む母や紅茶タイムの春時雨

小嶋長閑

鳴き始む森たちまちに百千鳥

志賀 勉

金継ぎの父の徳利春の雷

原田尚知

土筆煮る母の厨に土匂ふ

○辻 邦彩

つくしんぼ揃ひの袴背比べ

金子まさお

リモワーク終えて仰臥の子に春日

梶原松葉

もの言はぬ昔小町や梅の花

滑志田流牧

土筆摘む土手の向こうはひよこ組

片平るみ

土筆野に立つや遠き日沸々と

河村洋子

西東京稲門会俳句サロン（第153回）

次回 三月十日（金） 十四時

令和五年二月十日（金） 十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 鶯、野焼き他 他計5句

兼題 土筆、踏青 その他計五句

作者（号）のあいさとお願

春立つやシヨートカットで戻る妻

○吉成愚公

口笛に和して鶯付いてくる

石井三舟

夕暮れて野焼き燃ゆる赤や赤

水野瑞泉

裏道の蠟梅の家老い二人

桑田青三

野を焼きて大きくなりぬ秋吉台

木下石路

空耳かケキヨと初音のきこへをり

志賀 勉

趣味多き部屋の我楽多日脚伸ぶ

原田尚知

庭の木の重荷となりぬ春の雪

辻 邦彩

遠つ国戦火気遣ふ野焼きかな

金子まさお

武蔵野に住みて櫂の裸枝愛づ

梶原松葉

わが胸の炎伸び行く野焼かな

滑志田流牧

霊場の虚空を初音ほしいまま

◎河村洋子

風神と火神乱舞す野焼きかな

片平るみ

西東京稲門会俳句サロン(第152回)

次回 二月十日(金) 十四時

令和五年一月十三日(金) 十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 初一切、葉牡丹 他計5句

兼題 鶯、野焼き その他計5句

作者(「号」のあいじょうお順)

葉牡丹や陽に憂愁の渦ゆるむ

◎吉成愚公

今年こそ会おう会いたい年賀状

石井三舟

初仕事歩みも弾む喜寿の年

水野瑞泉

閉店の店先葉牡丹一鉢

桑田青二

「物語ワクライナの歴史」読み始め

木下石路

初詣札売る巫女の生あくび

○小嶋長閑

投げ入れるたびの火勢や飾焚

志賀 勉

初日射す巴里十五区のアパートに

原田尚知

一年を妻と語らふ雑煮かな

辻 邦彩

初夢は昭和の景色でアパ色

金子まよお

七草を叩く雛子や祖母の声

梶原松葉

ポケットに小銭ばかりや冬帽子

滑志田流牧

冷泉冢田緒正しき淑気かな

河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第151回)

次回一月十三日(金) 十四時

令和四年十二月九日(金) 十四時

田無公民館

田無公民館

兼題 冬椿、短日 他 計五句

兼題

初一切、葉牡丹 その他計五句

作者(「号」のあいづえお順)

道連れは己が影のみ枯野路

◎吉成愚公

短日や子を呼ぶ声も尖り気味

○石井三舟

冬椿あか鮮やかに迷いなし

水野瑞泉

凍て雲へ火の見櫓のぼつねんと

桑田青三

手びねりの花器に侘助挿しにけし

木下石路

秒針の進み変わらず暮れ早し

小嶋長閑

渋滞の開かず踏切暮早し

志賀 勉

短日や子の去ぬ車見送れる

高杉風至

過ぎし日の手控え繰るや年惜しむ

辻 邦彩

並び友合唱の声知音冴ゆ

金子まさお

寺子屋に子等の急げり日の短

梶原松葉

弁天の島の落日千鳥鳴く

滑志田流牧

十字墓いたはる様に冬椿

河村洋子

街の灯を灯していぎぬ初時雨

○片平るみ

西東京稲門会俳句サロン(第1500回)

次回十二月九日(金) 十四時

令和四年十一月十一日(金) 十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 小春(日)、花八手 他 計五句

兼題 冬椿、短日 その他計五句

作者(「号」のあいづえお順)

小春日や無為も徒食もよしとして

◎吉成愚公

手水鉢静かに揺れる花八つ手

石井三舟

存在を急に現す花八つ手

水野瑞泉

小春日は藁コザ敷いてお父様

桑田青二

一人逝ぎ二人転居や花八手

木下石路

何思ふ羅漢の相や冬に入る

小嶋長閑

冬日和懸案ひとつ片付けり

志賀 勉

何ひとつうなずけぬ世や寒鴉

高杉風至

踏ん張りて土の匂いや大根引く

○辻 邦彩

憂国忌正座して読む金閻寺

金子まさお

小春日やおしゃべり好きの運転手

○梶原松葉

縮みたる背や小春日の古都の道

滑志田流牧

花八つ手手話通訳の長き指

河村洋子

長き夜やいつかいつかはついに来ず

片平るみ

西東京稲門会俳句サロン（第一四九回）

次回十一月十一日（金）十四時

令和四年十月十四日（金）十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 落花生、鮭 他 計五句

兼題 小春（日）、花八手 その他計五句

作者（「号」のあいっえお順）

葛の葉に隠れて葛の花昏し

吉成愚公

旅プラン膨らむばかり夜長かな

石井三舟

鮭切の身そっと戻すやロシア産

水野瑞泉

こ時世について行きます牛膝

桑田青二

落花生つまみ養老監司読む

木下石路

何もせず終わる日もあつそぞろ寒

◎小嶋長閑

秋ともし川面に揺るる屋形船

○志賀 勉

落花生酒のつまみを子がつまみ

高杉風至

列車待つ寸暇の箸や走り蕎麦

辻 邦彩

秋夕焼け妻の歩幅に合わせ往く

金子まさお

薄紅に実は裂けまゆみはあの子の名

梶原松葉

噛みしめる口が齢やむかご飯

滑志田流牧

落花生割れば飛び出す幼き日

○河村洋子

西東京稲門会俳句サロン (第148回)

次回 十月十四日 (金) 十四時

令和四年九月九日 (金) 十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 霧、鶏頭 他計5句

兼題 落花生、鮭 その他計五句

作者 (「号」のあいうえお順)

一人往く黄泉路のやうな霧の谿

○吉成愚公

山頭火一冊入れて秋の旅

石井三舟

霧の中馬酔木の森に鹿の行く

水野瑞泉

墓石にジュラ紀の気配青蜥蜴

○桑田青三

鶏頭の花ごつごつと掲揚台

木下石路

編笠の揺れる後れ毛風の盆

小嶋長閑

更けると輪の縮みゆく盆踊り

◎志賀 勉

桐一葉竹馬の友の減るばかり

○高杉風至

安達太良を背にまつすぐの花野道

辻 邦彩

秋の音補聴器ずらし確かめり

金子まさお

一人食う秋刀魚に薄き塩を振る

梶原松葉

霧に擦るマッチ炎の微かなる

滑志田流牧

鶏頭のただ一本に気迫あり

片平るみ

西東京稲門会俳句サロン（第147回）

次回 九月九日（金）十四時

令和四年七月八日（金）十四時 田無公民館

田無公民館

兼題 雷、サングラス 他五句

兼題 霧、鶏頭 他五句

作者（「号」のあいっえお順）

紫陽花や自問自答の一日過ぐ

○吉成愚公

アスファルト蚯蚓干物になりけり

石井三舟

白き帆を目で追う女サングラス

水野瑞泉

老妻と小言いい合い苔の花

桑田青二

沖縄忌全戦没者読み悼む

木下石路

堂々のへそ出しルック雲の峰

小嶋長閑

片蔭の途絶へ片蔭探しけり

志賀 勉

銀髪に似合う色あひサングラス

高杉風至

かがり火に鶉縄操る腕かな

辻 邦彩

夕端居独り昭和を偲びけり

金子まさお

夏帯をきりりと結ぶ卒寿の背

◎梶原松葉

逆光の槍穂映れるサングラス

滑志田流牧

実直な妻の文箱にサングラス

片平るみ

正倉院青水無月の風まねく

河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第146回)

令和四年六月十日(金) 十四時 田無公民館

兼題 五月雨、かたつむり 他五句

作者(「号」のあいごえお順)

薫風に徳ぶ「おくに」の句境かな

吉成愚公

紫陽花やオランダ坂に雨煙る

石井三舟

かたつむり平和の使者よ枝に這い

水野瑞泉

スイカの皮白くなるまでしゃぶりし日

桑田青二

さみだるる理髪店には客一人

木下石路

五月雨や独り客待つ占ひ師

○小嶋長閑

白南風や若き漁師の面構え

志賀 勉

かたつむりひたすら堪ゆることばかり

○高杉風至

夏川の瀬音高きや河童橋

辻 邦彩

五月雨をひと日籠りて深海魚

梶原松葉

かたつむり動かぬ庭の緑濃し

滑志田流牧

潮錆の露座の大仏五月雨るる

◎片平るみ

五月雨や俳聖しのぶ光堂

○河村洋子

西東京稲門会俳句サロン（第145回）

令和四年五月十三日（金）十四時 フレンドリー

兼題 夏めく、踏 他五句

作者（「号」のあとじいとお順）

薰風やこの世に未練なほ数多

○吉成愚公

踏噛めば微かに苦し母の味

石井三舟

夏めくや列車の旅の海岸線

水野瑞泉

白牡丹なにごともなく庭の隅

桑田青二

青麦の波に拡がる畝に立つ

木下石踏

夏めくや網引く腕の黒光り

小嶋長閑

青空へ木遣りの声や夏来る

志賀 勉

薰風や散歩の犬と顔なじみ

高杉風至

葦簀張る牡丹の庭の日差しかな

辻 邦彩

夏めいて思ひ切り髪短くし

金子まさお

媪引くカートに揺るる言蒲かな

梶原松葉

踏の葉の下に小人と語らばむ

◎滑志田流牧

踏剥けば厨たちまち野となりぬ

○片平るみ

万緑を統ぶる初瀬の大伽藍

○河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第144回)

令和四年四月八日(金) 十四時 フレンドリー

兼題 四月馬鹿、すみれ 他五句

作者()号「」のあいごえお順)

野にありて指にふれたきすみれ草 金子おくに

ほどほどのほどが難し四月馬鹿 ○吉成愚公

どこまでも歩けるような春の宵 ◎石井三舟

砲弾の雨に生きよとすみれ草 ○水野瑞泉

桜咲く卒寿ボツリと「来年は」 桑田青三

仏壇に白磁の花器やすみれ草 木下石路

騙されてみたく今夜の四月馬鹿 ◎小嶋長閑

花筏ボートの櫂に乱れけり ○志賀 勉

鳥曇に見知らぬ人と野天風呂 高杉風至

おおらかに背伸びしたるや葱坊主 辻 邦彩

馬鹿言ふな父の口癖万愚節 金子まさお

疫のせや花見酒なくそぞろ行く ○梶原松葉

子蛙のいのち一つの青さかな ○滑志田流牧

すみれ草清貧なんて言はれても ○片平るみ

つばすみれ調べすがしき万葉歌 河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第143回)

令和四年三月十一日(金)パソコン通信句会

兼題 陽炎、木の芽 他五句その他計五句

作者「」号「」のあいごえお順

陽炎やコウリヤン畑の地平線

金子おくに

霏るや語ることなき引揚記

○吉成愚公

春は来た会う約束の友は亡し

石井三舟

単線に陽炎のたつ老いの旅

水野瑞泉

戦なき豊葦原や葦草

○桑田青三

木の芽時田空仏のほほえみよ

木下石路

陽炎や揺れて楽しき我が人生

小嶋長閑

無人駅鉄路の先のかげろひぬ

志賀 勉

補助輪をはずし乗れし子風光る

高杉風至

搗き立ての草餅温き道の駅

辻 邦彩

陽炎の踏切り揺らし電車往く

金子まさお

陽炎の中に見えくる道しるべ

梶原松葉

陽炎や明日へつなげる語の乏し

滑志田流牧

たんぼほを活けて一人の暮らしかな

◎片平るみ

古代史を巡る古道や木の芽風

○河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第142回)

令和四年二月十八日(金)パソコン通信句会

兼題 下萌、春の雪 他 計五句

作者「下」のあいごえお順

立春の陽のあたる道まろびたり

金子おくと

一人行く春泥あへて踏んでゆく

◎吉成愚公

降りしきるらむ鞆の浦にも春の雪

石井三舟

下萌や路傍に命宿るかな

水野瑞泉

寂庵の「寂」の丸石春の雪

◎桑田青三

下萌ゆる足の裏まで陽のよとして

木下石路

まばたきの馬の睫毛に春の雪

小嶋長閑

ループ橋越え春さぎの南伊豆

志賀 勉

人寄るを忌む世となれり冴え返る

◎高杉風至

軒先にだんごの朱文字梅見茶屋

辻 邦彩

自転車に試し乗りの子春隣

○金子まそお

スノボーの縦横逆と青き空

梶原松葉

草萌ゆる丸石神の甲州路

滑志田流牧

春風や五人寄りても読めぬ句碑

○片平るみ

白梅や晩節凜として生きむ

河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第141回)

令和四年一月十四日(金)十四時 フレンドリー

兼題 霜柱、初一切 他 計五句

作者(「号」のあと)つえお順)

七草をそらんじて粥すすりけり

金子おくに

余生などと言ふことなかれ年新た

◎吉成愚公

初雪や想い出連れて降りしきる

石井三舟

初雪や何処から聞こゆ越天楽

水野瑞泉

寒椿白き花芽をひた隠し

桑田青三

西の空冬夕焼けの墨絵かな

木下石路

飴切りのリズム楽しや初大師

小嶋長閑

直売の野菜満載日脚伸ば

志賀 勉

いつもよりたっぷり撒き餌初雀

○高杉風至

探梅の迷ひの先に地藏かな

辻 邦彩

混み合って結界の外初詣で

金子まさお

この年も長押に破魔矢立て掛けり

梶原松葉

冬麗の富士笠雲を目深にす

滑志田流牧

初買いのメトロノームに歩を合わせ

河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第140回)

令和三年十二月十日(金)パソコン通信句会

兼題 北風、年惜しむ他 計五句

作者()号「」のあいごえお順)

補聴器で冬の足音確かめり

○金子おくに

北風や生足闊歩して渋谷

吉成勝好

今夜また寄せ鍋ですと妻の声

石井三舟

北風に抗い強き麦芽かな

水野瑞泉

日記帳十二月から始まりぬ

桑田青三

北風や鳥を吸い込む大櫓

木下石路

鷹舞ひて富士の裾野に溶けにけり

小嶋長閑

弔問も叶わぬ別れ年惜しむ

志賀 勉

年惜しむ他郷を終の地ときめて

○高杉風至

ラグビーの楕円のゆくへ遠く追ふ

辻 邦彩

北風に干手を上げ大櫓

○金子まさお

寒いねと言ひ合える人なき朝(あした)

◎梶原松葉

北風や衣文うねれる力士像

滑志田流牧

綿虫の命のままに漂へり

片平るみ

千人の千の祈りや聖夜ミサ

○河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第139回)

令和三年十一月十二日(金)パソコン通信句会

兼題 小春、時雨他 計五句

作者「号」のあいごえお順

食べること喜びとなり菊臈

金子おくに

泥大根どんと積まれて道の駅

◎吉成勝好

オリオン座教えしひとは今いずこ

石井三舟

白壁に姿映して小春かな

水野瑞泉

垣根越し話の弾む小春かな

桑田青三

あねいもと小春日和をたまわりぬ

木下石路

時雨るるや畑の真中の鹿威し

小嶋長閑

山茶花やベンチに独りバスを待つ

志賀 勉

山門の仁王としぐね宿りかな

高杉風至

大根ひく豊か大地の糧を得む

辻 邦彩

菊花展背比べして天地人

金子まさお

水鳥や石橋渡る人もなく

梶原松葉

黄落や壺中の天地ここにあり

○滑志田流牧

青空はもう遠すぎる秋の蝶

○片平るみ

小春日を使いきつたる一人旅

◎河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第138回)

令和三年十月八日(金)パソコン通信句会

兼題 初紅葉、柿他 計五句

作者「」号「のあいごえお順」

十月に生まればんくらにして老ゆ

金子おくに

長病みの母へ窓開け初紅葉

○吉成勝好

栗のイガ弾けて三つ子顔を出す

石井三舟

山の辺の道をスタート初紅葉

水野瑞泉

瓢箪や何も語らず風に揺れ

桑田青三

二個並び揺れる風船葛かな

木下石路

秋澄むや天をめぐけて竹とんぼ

小嶋長閑

果樹園の実の熟しをり小鳥来る

志賀 勉

今日の憂さ明日へ残さじ温め酒

高杉風至

秋天へ一直線の徒競走

辻 邦彩

もう少し一緒に歩こう初紅葉

金子まさお

朝顔の下葉枯れつつ今朝の藍

梶原松葉

みどり児の眼に溢れぬる鱗雲

滑志田流牧

柿照るや富士を遠くに露天風呂

○片平るみ

息災てふ大きな恵み豊の秋

◎河村洋子

東京稲門会俳句サロン(第137回)

令和三年九月十日(金) パソコン通信句会

兼題 芒、秋澄む他 計五句

作者(「号」のあいごえお順)

硬質の肌赤々と柘榴かな

金子おくに

芒原潜むは姫か山姥か

吉成勝好

秋の風老舗書店が消ゆるとか

○石井三舟

秋澄むや法螺の響きの山々に

水野瑞泉

八十路への餞別にせん花芒

桑田青三

蘇民将来姿消えゆく芒原

木下石路

身の丈の風のままなる芒かな

小嶋長閑

救急車過ぎてて虫の音またすだく

○志賀 勉

暮るるほど白き山雲秋澄めり

○高杉風至

分け入りて忘我の境や芒原

辻 邦彩

破れ垣繕ふように葛の花

◎金子まさお

赤とんぼ夫の免許証捨てられず

梶原松葉

年月のかがやきをねり芒原

滑志田流牧

始まりは細胞一つ天高し

片平るみ

絵硝子のマリアとイエス秋澄めり

河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第136回)

令和三年八月十三日(金)パソコン通信句会

兼題 星月夜、初嵐他 計五句

作者「」号「」のあいごえお順

研ぎし刃のまないたを打つ秋涼し

金子おくに

路地裏に胡弓の音色星月夜

吉成勝好

故郷や土塀に懸かる百日紅

石井三舟

飛び出さむ虎のふすま絵初嵐

水野瑞泉

ジーンズの破れ拡がる初嵐

桑田青三

黙祷の八時十五分広島忌

木下石路

二人していつもの宇治茶今朝の秋

小嶋長閑

山小屋の雑魚寝今宵は星月夜

志賀 勉

初あらし膝をはなれぬ老いし猫

○高杉風至

涼新たラジオ体操急弾む

辻 邦彩

星月夜初めて君の指に触れ

○金子まさお

ホスピスの櫛一樹や蝉の声

梶原松葉

老ゆる日のグラスに映す星月夜

○滑志田流牧

神の地に入りてこの世の汗を拭く

片平るみ

祈ること多き八月風重し

◎河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第135回)

令和三年七月九日(金)パソコン通信句会

兼題 夕焼け、ひまわり 他計五句

作者「号」のあいごえお順

冷水に湯剥きのトマト風わたる

金子おくに

追ひつけぬ人追ひつづけ走馬燈

◎吉成勝好

入道雲戻れないんだあの頃に

石井三舟

仰ぎ見る西は浄土か夕焼けぬ

水野瑞泉

空き部屋が一つあります蝉の穴

桑田青三

日本語で唄うボサノバ梅雨の空

木下石路

待てど来ぬ返事待ちたり梅雨寒し

小嶋長閑

夕焼けや明日の旅路を吉とよむ

○志賀 勉

万緑やただ一筋の縦走路

高杉風至

直立の漲る力ひまはり野

辻 邦彩

夕焼けに富士丹沢は寝る支度

金子まさお

梅雨寒や昭和究めし人逝けり

梶原松葉

青年の大志を問はば雲の峰

滑志田流牧

梅漬けの名手の母の米寿かな

片平るみ

地の神のつばやく様に滴れり

河村洋子

西東京稲門会俳句サロン（第134回）

令和三年六月十一日（金）パソコン通信句会

兼題 緑陰、雨蛙 他 計五句

作者（「号」のあいうえお順）

三代のあやめの柄の浴衣かな

金子おくに

余生なほ波乱の予感青嵐

吉成勝好

梅雨空を逍遙すれば哲学者

石井三舟

緑陰に声明ひびき山の寺

水野瑞泉

雨蛙ペットののように手の平に

桑田青二

夏の蝶何か言いたげ身に纏ひ

木下石蒨

狂ひなく尺取る虫の歩みかな

小嶋長閑

一声が友呼ぶ畔や雨蛙

志賀 勉

滴れる山を映して沼しづか

高杉風至

雨蛙竹に二匹の動かざる

辻 邦彩

緑陰に入りて靴ひも緩めけり

◎金子まさお

五月雨のひと日徒長枝際立てり

梶原松葉

短夜や命ひとつの羽化したる

○滑志田流牧

緑陰に神も憩ひぬ大社

片平るみ

緑陰を大きく使ひ太極拳

○河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第133回)

令和三年五月十四日(金)パソコン通信句会

兼題 子供の日、蟹 他 計五句

作者(「号」のあいうえお順)

茉莉花や鯨の干物と納豆と

金子おくに

膝小僧擦りむく誉れ子供の日

吉成勝好

路地裏に蛇の目消えゆき緑雨かな

石井三舟

我が庵にカニの甲羅か合わせ住む

水野瑞泉

高圧線跨ぐ武蔵野青葉若葉

桑田青三

フランスパン小脇に抱え風薫る

木下石路

腹の子をかかへて早し沢の蟹

小嶋長閑

マスクとり胸いつぱいの新樹風

志賀 勉

南風や帆をはる漁夫の力瘤

高杉風至

垣根越し白ぼうたんを愛でにけり

辻 邦彩

ラケットを空に振りぬき夏に入る

○金子まさお

草小石分けて沢蟹ほの赤き

梶原松葉

川一つ隔てお江戸の鯉幟

滑志田流牧

これよりは江戸の内なり濃山吹

片平るみ

戦なき世をとこしへに子供の日

◎河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第132回)

令和三年四月九日(金)パソコン通信句会

兼題 惜春 たんぼぼ 他 計五句

作者(「号」のあいうえお順)

楠の葉の降る勢いや春惜しむ

金子おくに

地図の上なほ惜春の一人旅

○吉成勝好

生きている桜吹雪を浴びている

◎石井三舟

奈良町で茶粥をすすり春惜しむ

水野瑞泉

惜春やコーヒークップ切り株に

桑田青三

惜春や半跏菩薩のふかき笑み

木下石路

春惜しむ湯宿に並ぶ桐の下駄

小嶋長閑

飛花落花枝から枝へ鶉渡る

志賀 勉

テープ切る女優に花のふぶきけり

高杉風至

青空に一樹を覆ふ花こぶし

辻 邦彩

落ち椿踏む足元のおぼつかな

金子まさお

里人の昔語りや櫻山

梶原松葉

つちふるやウイグル族の苦の便り

○滑志田流牧

白蝶の光の使者となつてをり

片平るみ

聖鐘の余韻の中に春惜しむ

河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第131回)

令和三年三月十二日(金)パソコン通信句会

兼題 野遊び 雛祭 他計五句

作者(「号」のあいうえお順)

灯を消しぬ湯舟の窓の春の月

金子おくに

野遊びや一人こければ皆倣ふ

吉成勝好

タワ―二つ埋み残して春霞

石井三舟

園児たち歌声こぼるひな祭り

水野瑞泉

下駄箱の上の小さな雛祭

桑田青三

四人組縦一列に児ら散歩

木下石蒨

野に遊ぶ子らに陽の射す花の雲

小嶋長閑

散策の帰路は独りや花の冷

志賀 勉

後れ毛をなほし家伝の雛かざる

○高杉風至

滑らかな水車の回り水温む

○辻 邦彩

野遊びや万葉人は菜を摘みし

金子まさお

八十年(やそとせ)の父の墨跡雛の箱

◎梶原松葉

をみな子に京の訛りや流し雛

滑志田流牧

麦踏めば大地の声の聞こへ来る

片平るみ

新しきことを始めむ春の土

河村洋子

西東京稲門会俳句サロン（第130回）

令和三年二月十二日（金）パソコン通信句会

兼題 猫柳 春時雨 他計五句

作者（「号」のあいうえお順）

姉曰く元気が取り柄猫柳

金子おくに

冬薔薇の紅の暗さよ友逝けり

吉成勝好

ほろ酔いの脇に句集や春の宵

石井三舟

幼子がそつと撫で行く猫柳

○水野瑞泉

淡き陽をもてあそぶかな猫柳

桑田青三

核禁条約署名集めし露の臺

木下石路

春立つや待合室にシヨパン聞く

小嶋長閑

見れば触れ触れば和むや猫柳

志賀 勉

さしかける妻に合はす歩春しぐれ

○高杉風至

春時雨カーブミラーに滴垂る

辻 邦彩

縄文の竪穴しつとり春時雨

金子まさお

猫やなぎ河原野球の補欠なり

梶原松葉

くちばしを濡らす雀や牡丹雪

滑志田流牧

奥飛驒の風の研ぎ行く氷柱かな

◎片平るみ

ロザリオを滑らす指の余寒かな

○河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第129回)

令和三年一月八日(金) パソコン通信句会

兼題 春隣、雪だるま 他計五句

作者(「号」のあいうえお順)

泣き虫が今裂帛の寒稽古

○吉成勝好

夕闇に一人ぼっちの雪だるま

石井三舟

疎水行く船の白波春隣

水野瑞泉

鉄棒をそつと手のひら春隣

桑田青二

屠蘇の香や米寿の祝い楽しめり

木下石路

春隣出番を待ちしランドセル

小嶋長閑

寒の入鯉一点を動かさる

◎志賀 勉

食積や妻と経てきし半世紀

高杉風至

一碗におらが自慢の雑煮かな

辻 邦彩

初詣で祈り殺さん疫病菌

金子まさお

屋敷神に米のおひねり大旦那

梶原松葉

流す湯に硫黄の香あり春隣

滑志田流牧

もう何もいらぬ齢にマスク買ふ

片平るみ

たつぷりと乳吸ふ吾子や春隣

河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第128回)

令和二年十二月十一日(金)パソコン通信句会

兼題 冬日和、白菜 他計五句

作者(「号」のあいうえお順)

冬日和こんな私でまあいいか

吉成勝好

冬日和喉の奥まで陽を入れる

石井三舟

冬晴れや蔵王権現に懺悔して

水野瑞泉

ずわい蟹箸一本の戦かな

桑田青三

静かなるはやぶさ一条石露の花

木下石露

どっこいしよ言わぬ日はなし日向ぼこ

小嶋長閑

水脈曳きて並び寄せたる鴨の陣

志賀 勉

白菜を真二つに断ち妻元気

◎高杉風至

鯛焼の温もり残る餡子かな

辻 邦彩

冬日和老いの一曰会話無し

金子まさお

逝きし子の齡数えて十二月

梶原松葉

ドルメンに朱の残りたる冬野かな

滑志田流牧

今日も良い一日でしたおでん酒

◎片平るみ

西東京稲門会俳句サロン(第127回)

令和二年十一月十三日(金)パソコン通信句会

兼題 返り花、落葉 他計五句

作者(「号」のあいうえお順)

喜寿といふ節目静かに冬立つ日

吉成勝好

冠雪の富士一瞬の車窓かな

石井三舟

老いらくの友と談笑返り花

水野瑞泉

落葉なき箒目正し枯山水

桑田青三

廃校の裏の小道や返り花

木下石路

どれにしよう迷ふ駅弁冬うらら

小嶋長閑

動かざる亀の欠伸す冬ぬくし

志賀 勉

話し手とたもつ間隔日向ぼこ

◎高杉風至

草庵にひとすぢ煙る落葉焚

◎辻 邦彩

朝に見ず帰りに二輪帰り花

金子まさお

返り花話途切れし杣の道

梶原松葉

紺碧の秋天われの画布にあり

滑志田流牧

亡き母の家に一輪帰り花

片平るみ

西東京稲門会俳句サロン(第126回)

令和二年十月九日(金) パソコン通信句会

兼題 金木犀、冬支度 他計五句

作者「号」のあいうえお順

ありがとひとつひとつの冬支度

金子おくに

祖父の忌や逸話を耳に新走り

吉成勝好

秋雨や路地裏を行く傘一つ

石井三舟

ペランダのゴムの木部屋へ冬支度

水野瑞泉

約束は校舎の裏の金木犀

桑田青三

朝顔やある日ひとつも咲かずをり

木下石路

秋澄むや使ひ慣れたる虫眼鏡

小嶋長閑

薪割りの日毎嵩増す冬支度

志賀 勉

平凡な暮らしに知足温め酒

高杉風至

黒ベスト去年のほつれや冬支度

辻 邦彩

金木犀咲き初めしかと遠回り

金子まさお

味噌蔵の開け放たれし冬支度

○梶原松葉

朝の茶の身に沁む方丈一間かな

◎滑志田流牧

病棟の窓それぞれに後の月

◎片平るみ

西東京稲門会俳句サロン（第125回）

令和二年九月十一日（金）パソコン通信句会

兼題 秋の雲、木の実 他計五句

作者（「号」のあいうえお順）

昨日今日また忘れ物秋の雲

金子おくに

今日もまた何かを忘れ木の実降る

吉成勝好

天心の月に乾杯孤影あり

石井三舟

見てみてと両手いっぱいの木の実かな

水野瑞泉

木の実ただ拾いて籠に入れてみる

桑田青三

丹誠を込めたる梨や剥きてをり

木下石路

木の実落つ峠に朽ちし道しるべ

○小嶋長閑

無住寺となりて久しや木の実落つ

志賀 勉

出不精を自粛としたり栗をむく

◎高杉風至

里山に舞ひたる群れや稲雀

辻 邦彩

秋の雲わが半生は薄曇り

金子まさお

瓶に差す穂草花粉をこぼし初む

梶原松葉

草に寄り蟋蟀を聴く車椅子

○滑志田流牧

鈴虫を鳴かせ宿題抄らず

片平るみ

西東京稲門会俳句サロン(第124回)

令和二年八月十四日(金)パソコン通信句会

兼題 秋澄む、枝豆 他計五句

落ち蟬のかくも多かり母逝く日

金子おくに

夏草や伸び放題にある秩序

○吉成勝好

秋澄むや骨董市に古時計

石井三舟

とりあえず枝豆口へ談笑す

水野瑞泉

炎天や更地にぼつり蛇口あり

桑田青三

秋澄むや疎開より荷台帰省しこと

木下石路

秋澄むや空にふわりと飛行船

小嶋長閑

広き野を我が物顔に鬼やんま

◎志賀 勉

朝顔や雲に未だある夜の名残

高杉風至

安曇野の風に一面蕎麦の花

辻 邦彩

秋澄みて多摩の山並近付きぬ

金子まさお

朝顔の花鉢ならぶ無人駅

梶原松葉

秋澄むや黒潮大いに曲がりたり

◎滑志田流牧

木槿咲く里は静かに老いにけり

片平るみ

東京稲門会俳句サロン(第123回)

令和二年七月十日(金)パソコン通信句会

兼題 合歓の花、夜の秋 他計五句

作者(「号」のあいうえお順)

葉に触れて閉じるおかしさ合歓の花

金子おくに

悼む人まばらな葬や梅雨夕焼

吉成勝好

合歓の花園児静かに眠りけり

石井三舟

コロナ禍に人恋しきや夜の秋

水野瑞泉

迷い来て迷わず去りぬ夏の蝶

◎桑田青三

たそがれやはるか梢に合歓の花

木下石路

たそがれの瀬音静けき合歓の花

小嶋長閑

夏ゆやけ遠ざかりゆく童歌

○志賀 勉

夕雲に残る茜やねむの花

○高杉風至

風鈴の音あちこちや京の路地

辻 邦彩

砂利道を鉱泉宿へ合歓の花

金子まさお

再版のペストを読み夜は秋

梶原松葉

ひとしづく光る今生合歓の花

滑志田流牧

はぐれ蟻思案中なり草の陰

片平るみ

カザルスのチェロの音色や夜の秋

河村洋子

西東京稲門会俳句サロン（第百二十二回）
令和二年六月十二日（金）ネットによる句会
兼題 夏帽子、心太 他五句

親の声と共に飛び来る夏帽子

金子おくに

夏帽を胸に一札遭難碑

◎吉成勝好

バラ園や人影もなく小雨降る

石井三舟

リズムとり歩く親子や夏帽子

○水野瑞泉

夏来る厠は軽きシャワー音

桑田青三

夏の空感謝の編隊一直線

木下石路

閉店の二文字小さく梅雨に入る

◎小嶋長閑

木洩れ日に鯉浮かび来る青葉闇

志賀 勉

黒南風や空白多き予定表

○高杉風至

少年の日焼けの肩の夏帽子

辻 邦彩

心太三寸の滝椀に落ち

金子まさお

月山の風撫づるがに植田ゆく

梶原松葉

一茶住みし蔵の暗がり青嵐

滑志田流牧

心太言わずもがなの事を言ひ

片平るみ

西東京稲門会俳句サロン（第二百二十一回）
令和二年五月八日（金）ネットによる句会
兼題 風薫る、更衣 他五句

作者（「号」の五十音順）

ビルマの記一気に読ませ風薫る

金子おくに

更衣しても憂愁去りがたく

吉成勝好

散歩道三日見ぬ間の柿若葉

石井三舟

颯爽と改札タッチ衣更え

○水野瑞泉

夏野原名もなき草に襲われて

桑田青三

永き日や三ヶ月大き星を追ひ

木下石蒨

薫風や客引く馬の長まつげ

○小嶋長閑

DJポリス身振り軽やか更衣

○志賀 勉

賑はいの失せたる町や蟻の列

◎高杉風至

奥多摩の尾根と競ふや鯉幟

○辻 邦彩

秘め事をそつと脱ぎ捨て衣更え

○金子まさお

風薫る納経帳の字の太し

梶原松葉

井頭の木々の膨らや風薫る

滑志田流牧

声変わりして少年の更衣

○片平るみ

さみどりの干菓子の光る立夏かな

河村洋子

西東京稲門会俳句サロン(第百二十回)
令和二年四月十日(金)ネットによる句会
兼題 春の夜、野遊び 他五句

(俳句の五十音順)

野遊びの万葉のうた聴くひと日

金子おくに

春眠や膝より落つる文庫本

○ 吉成勝好

春の陽を浴びて大の字雲流る

○ 石井三舟

春の夜大仏うどん奈良に宿

水野瑞泉

ゴッホ描く油絵のごとくミモザ咲く

桑田青三

夜半の春金星ゆるり西に落つ

○ 木下石路

後れ毛の揺れて花舞ふ隅田川

小嶋長閑

野遊びやベンチに小さき靴ひとつ

○ 志賀 勉

風を行く白帆のごとし蝶の翅

高杉風至

春の夜やほろ酔い心地口ずさむ

辻 邦彩

雨だれは変ホ長調春の夜

○ 金子まさお

走り根に吹き寄せられて桜蕊

◎ 梶原松葉

春の夜の扉重たし蔵王堂

滑志田流牧

三匹のいてややくしや猫の恋

片平るみ

春疾風汚れしものを吹き飛ばせ

河村洋子

西東京稲門会俳句サロン（第百十九回）
令和二年三月十三日（金）ネットによる句会
兼題 春雷、蒲公英 他五句

山影を映す春雷音無くも

金子おくに

春雷に秩父連山目覚めたる

吉成勝好

たんぽぽの絮吹いて追う幼児の手

水野瑞泉

枝垂れ桜膨らみ指に固きかな

桑田青三

昼下り背伸びひとつの子猫かな

石井三舟

春めくや札売る巫女の富士額

小嶋長閑

転寝に本取り落とす春の雷

○志賀 勉

寝し河馬の耳のみぴくり春の雷

○高杉風至

赤い糸願ひ届けやつるし雛

辻 邦彩

すみれ草鎌倉古道の途切れをり

金子まさお

春雷の遠のきゆくや一人の餉

梶原松葉

椿落つ他に音なき遊水池

滑志田流牧

ふらこの一漕ぎごとに空の増ゆ

片平るみ

春障子閉めて濁世を逃れたる

◎河村洋子

西東京稲門会俳句サロン（第百十八回）
令和二年二月十四日（金）田無公民館
兼題 春の風邪、猫柳 他計五句

法螺貝の山に響くや節分会

辻 邦彩

春の風邪目もと美人の急に増え

水野瑞泉

帰りにもまた撫でて行く猫柳

金子まさお

眠り姫になってしまひぬ春の風邪

片平るみ

春風や蕎麦屋の酒の酔い心地

◎ 石井三舟

春寒の廊下の奥の透視室

河村洋子

春眠や平和なるかな脳溶けて

桑田青三

釣れぬ子がうつらうつらや猫柳

○ 高杉風至

厨より菜を叩く音春立つ日

○ 吉成勝好

春の風邪こわれしままの鳩時計

梶原松葉

震災の跡のぬかるみ梅三分

滑志田流牧

春立つや帽子を脱ぎし辻地蔵

○ 小嶋長閑

願掛けに賑はふ天神梅三分

志賀 勉

立春大吉陶磁器の窯開きけり

木下石路

シヤム猫の縄張りの端猫柳

金子おくに

西東京稲門会俳句サロン（第百十七回）
令和二年一月十日（金） 田無公民館

兼題 新年一切及び雪催い 他計五句

岩風呂の静寂つつむ雪催ひ

辻 邦彩

久し振り園児とハグす年新た

水野瑞泉

書初めは無の字の多き写経かな

○金子まさお

昆布散らし郷の正しき雑煮かな

片平るみ

カレンダー丸め直してさあ新年

石井三舟

物売りの老女の猫背雪もよひ

◎河村洋子

新年やどっこいしょうと起き上がる

桑田青三

城跡に抜け道の井戸落葉溜む

○高杉風至

石を蹴る少年独り寒夕焼

吉成勝好

書初めの希望いっぱい体育館

梶原松葉

初凧や岩に睡める石たたき

滑志田流牧

初御空富士を横切る番鳥

小嶋長閑

議事堂の衛士微笑みぬ冬ぬくし

志賀 勉

新元号賀状に大きく言祝げり

木下石露

お隣も夫婦のみなり福寿草

金子おくに

西東京稲門会俳句サロン(第百十六回)
令和元年十二月十三日(金)田無公民館
兼題 十二月、水仙 他計五句

群生の風に堪へたる水仙花

辻 邦彩

十二月百済観音独り占め

水野瑞泉

いくつかの悔いを置き去り十二月

金子まさお

水仙の寂しき崖を喜ばす

片平るみ

何やかやとこのつまりは十二月

石井三舟

靴下の小さき穴や開戦日

◎河村洋子

無為の日のページを伏せて十二月

桑田青三

吊橋や嶺に一糸の冬の滝

高杉風至

「巫女バイト求む」神社の年用意

吉成勝好

大根の面取り確と屋台酒

梶原松葉

裏返し湖の香を焼く寒諸子

滑志田流牧

雪吊りの雪待つ縄の気品かな

◎小嶋長閑

白き富士見上げ峠の野水仙

志賀 勉

紺碧の空が寂しい冬桜

松谷富彦

借金で武器買ふ国や年暮るる

木下石路

水仙にいつとき日差し移り来る

金子おくに

西東京稲門会俳句サロン（第百十五回）
令和元年十一月八日（金）イングリル
兼題 立冬、大根一切 他計五句

垂れ架かる屋根に熟柿の重さかな

作者
辻 邦彩

軒下に干し大根の白さかな

水野瑞泉

四万十の水底澄んで冬に入る

金子まさお

門扉までたった三歩の草紅葉

○片平るみ

台風一過悲しきまでに青き空

○石井三舟

行く秋や古りし木組みの礼拝堂

河村洋子

立冬や妻の踵も白みたり

桑田青三

抜き捨ての瘦せ大根に豪雨かな

高杉風至

秋天へ意志ある如く楕円球

◎吉成勝好

恵林寺の軒深き里柿すだれ

梶原松葉

カルダンの装ひ新た毒きのこ

滑志田流牧

すつきりと今朝の目覚めや大根切る

小嶋長閑

棹歌の間延びしたるや小六月

志賀 勉

冷（すさ）まじや半身削がれし武甲山

松谷富彦

立冬の湯船や校歌つる覚え

木下石路

一面の芒に多摩湖光合つ

金子おくに

西東京稲門会俳句サロン（第百十四回）
令和元年十月十一日（金）田無公民館
兼題 黄落、肌寒 他計五句

作者

肌寒や山ふところの夕景色

辻 邦彩

肌寒や焙煎の香の珈琲店

水野瑞泉

肌寒し猫背の母にもう一枚

○金子まさお

肌寒や下駄音響く坂の街

片平るみ

肌寒や馴染の店は北出口

石井三舟

黄落や衰へていく記憶力

河村洋子

黄落や老いの居場所を探したり

桑田青三

散りしきし黄落を巻き風遊ぶ

○高杉風至

橿田球青空に舞ふ黄落期

吉成勝好

秋彼岸供花なき墓の墓誌を読む

梶原松葉

登高のザックに鳴れる金の鈴

滑志田流牧

金木犀切られ売地となりにつり

小嶋長閑

間に合へり釣瓶落しの連絡船

志賀 勉

一陣の風を形に稲雀

◎松谷富彦

スーパーで眼の合ひて秋刀魚焼く

木下石踏

閑居して手間惜しまずの栗ご飯

金子おぐに

西東京稲門会俳句サロン（第百十三回）
令和元年九月十三日（金）イングビル
兼題 天の川、蝸他計五句

旅の空南十字と天の川

木下石路

名月に風の音聞き一人酌む

小嶋長閑

おほかたの昭和を生きて秋刀魚焼く

◎片平るみ

明けやらぬ森をひべらし独り占め

志賀 勉

落蟬をそつと垣根に置く児かな

○石井三舟

新妻の繰る農機豊の秋

吉成勝好

括られて十日の菊となりにけり

○松谷富彦

ひべらしやワンオクターブ上げし雨後

水野瑞泉

ポケットに未熟の匂ひ青蜜柑

○滑志田流牧

单身赴任の夫の戻る夜天の川

河村洋子

おぼつかぬ耳に蝸透く音色

金子おくに

蝸や今夜は酒を飲まぬ日に

桑田青三

天の川賢治の夜汽車コトコトと

○金子まさお

ひべらしの遠音郷愁よびおこす

高杉風至

ひべらしや墓苑に閉門告ぐる鐘

梶原松葉

靖国の木々見つめきし終戦日

辻 邦彩

西東京稲門会俳句サロン（第百十二回）
令和元年八月九日（金）イングリビル
兼題 新涼、生身魂他計五句

武蔵野をいとしむ余生良夜かな

○河村洋子

生身魂しわびきひとつ座を静め

◎金子まさお

新涼の白き砂利踏む秩父道

滑志田流牧

白き雲西瓜は井戸の中にあり

石井三舟

生身魂ヌマホ弄りて小半日

桑田青三

奥都城のひとかたまりにある暑さ

○金子おくに

平家一門滅びて終はる夏期講座

○片平るみ

子らはみな過疎の村去り草田男忌

○松谷富彦

女童のほほづき鳴りて笑顔かな

梶原松葉

新涼や積読本が動き出す

水野瑞泉

蛸や初音の藪を目で追ひぬ

木下石路

秋風やまたひとり消す人名簿

高杉風至

フィナーレの花火黙して闇動く

志賀 勉

ビル解体外人工の三尺寝

○吉成勝好

心地好き父の背中や遠花火

○小嶋長閑

手花火の閃光しすか広がりぬ

辻 直邦

西東京稲門会俳句サロン（第百十一回）
令和元年七月十二日（金）イングリル
兼題 睡蓮、汗他計五句

睡蓮やモネの好みしシヤポニスム

河村洋子

睡蓮はつつむき加減水鏡

金子まさお

睡蓮の泥の匂いを払ひけり

滑志田流牧

尾瀬池塘雲も映してヒツジ草

石井三舟

汗知らぬ仙人のよう引き籠り

桑田青三

かく汗もかいた分だけ畑ありて

金子おくに

汗ぬぐひピカソの顔となりにけり

◎片平るみ

滴りて緑衣を纏ふ磨崖仏

松谷富彦

天心に梅雨満月や独りなり

梶原松葉

睡蓮や葉の揺り籠に眠るかな

水野瑞泉

枇杷を食む妻と競いて鳥のごと

木下石路

夕焼やかつては豆腐売りの笛

○高杉風至

ランドセル置くや飛び出しトンボ釣り

三枝 博

糸とんぼ水辺の草に消え入りぬ

志賀 勉

難題の先少し見え新茶汲む

○古成勝好

ビニール傘溜まりて長き梅雨明け

◎小嶋長閑

あぢさゐや斜面に青き毬の群れ

辻 邦彩

西東京稲門会俳句サロン（第百十回）
令和元年六月十四日（金）インクビル
兼題 梅雨、さくらんぼ他計五句

一言も会話なき日や梅雨寒し

◎河村洋子

釣り船の数増してきて梅雨晴れ間

吉成勝好

防波堤頬に風受け走り梅雨

水野瑞泉

武蔵野に今朝すつぼりとはしり梅雨

金子おくに

宅配に両の手で受くさくらんぼ

○松谷富彦

瀬音聞き大の字で見る夏の空

石井三舟

百枚の鏡や棚田に水引ける

滑志田流牧

蝸牛濡れしベンチを横切れり

志賀 勉

古茶新茶夫には夫の若き日々

○片平るみ

梅雨寒や靴に丸めし新聞紙

○木下石路

梅雨晴れ間穂高の峰は雪まだら

金子まさお

夏めくや飽きぬ窓から小海線

辻 直邦

せせらぎの間に溶け入る虫かな

小嶋長閑

うすものや勝気がけらは小股なる

高杉風至

行商の生利節待つ甲斐の里

梶原松葉

西東京稲門会俳句サロン（第百九回）
令和元年五月十日（金）イングリッシュ
当季雑詠 計五句

春暁の瀬音さやかに目覚めけり

小嶋長閑

出会より別離が多し花は葉に

◎高杉風至

オルガンの響きの中の甘茶仏

木下石路

緑さす令和初日の二重橋

河村洋子

新緑を床に映して初瀬の寺

○水野瑞泉

一撃を筍の根に打ち下ろし

金子まさお

聖母子のステンドグラス柿若葉

◎松谷富彦

万緑や百穴奥のヒカリゴケ

志賀 勉

水切りの石よく跳ねて夏に入る

◎吉成勝好

吹き流し五色ゆるりと浮きにけり

辻 直邦

若葉風践祚ことほぐ赤ワイン

滑志田流牧

肅然と天子の譲位新樹光

梶原松葉

薫風を切り裂いて行く電車かな

石井三舟

トンネルの中に泉境山若葉

片平るみ

穴かがる三針五針と目借時

金子おくに

西東京稲門会俳句サロン（第百八回）

平成三十一年四月十二日（金）

兼題 春風 野遊びほか計五句

野遊びや農取岳に手をかざす

安原千恵

ポケットに野遊びの花萎れをり

梶原松葉

天ぞかる鄙（ひな）と詠まれし野に遊ぶ

○高杉風至

野遊びや帰りは父の肩車

○志賀 勉

御仏も睨閉ぢたり春の風

小嶋長閑

春風や我も時代を継ぐひとり

金子まさを

草の名を知りたがる子や春遊

河村洋子

西行の塚の円かや桜満つ

◎滑志田流牧

春風や駆ける少女の胸の揺れ

吉成勝好

野一面布陣終えたる土筆かな

○三枝 博

花冷や羅漢のあばらあらわなる

松尾良久

川底に影走らせて上り鮎

松谷富彦

青ぬたや旨しと言われおしやうしい

金子おぐに

万愚節愛してゐると言ふてみる

片平るみ

街灯の空にぼっこり花の雲

木下石路

光浴びぬくもり楽し蛙の子

辻 直邦

西行の庵に巡りて花の山

水野博司

花冷えや掲げられたる新元号

石井三舟

西東京稲門会俳句サロン(第百七回)
平成三十一年三月八日(金)
兼題 春の水 田楽 ほか計五句

山巔の雫を集め春の水

金子まさお

法螺貝に春呼ぶ護摩の炎立つ

○松尾良久

田楽を互い違いに旧い友

石井三舟

大空に確かと道あり鳥帰る

◎松谷富彦

音立てて走る炎の野焼かな

小嶋長閑

落人の里のさざめく春祭り

高杉風至

振り返る馬琴の墓や椿落つ

○滑志田流牧

あたたかし双子乗せたる乳母車

志賀 勉

パセリ蒔く土黒くると春の水

金子おくに

玄米をうまく炊き上げ春の水

木下石蓐

菩提寺の泉うるほふ春の水

梶原松葉

鴨帰るシベリアの地に眠る兵

河村洋子

全力で山下り行く春の水

三枝 博

春光や子等の育てし花時計

片平るみ

梅日和坊に天狗の面なごむ

安原千恵

春風やG1初の女性騎手

吉成勝好

風光る夫婦決まりの遊歩道

辻 直邦

ランドセル鳴らして帰る春落葉

水野博司

次回 四月十二日(金) 十四時 フレンドリ
兼題 春昼 野遊び ほか五句

今月の特選句

(天) 大空に確かと道あり鳥帰る 松谷 富彦

「確か」は「しか」と読みます。

「鳥帰る」は春になって北へ帰ってゆく渡り鳥の景で、古来多くの俳人によって読まれてきました。

この「確か」という表現が、意表を突いた且つ「道」に懸る適切な言葉で「鳥帰る」の大景が眼に浮かんできます。

(地) 振り返る馬琴の墓や椿落つ 滑志田流牧

俳句同好会のメンバーは散策の会の毎月の散策にいつも多数参加しています。

先月の例会では小石川を巡り、東大植物園の梅林などを吟行しました。

茗荷谷駅近くのお寺での一句が多くの票を集めました。

(人) 法螺貝に春呼ぶ護摩の炎立つ 松尾 良久

高尾山では、春の到来を告げるといわれる、火渡りの儀式があり、大護摩を焚き上げてそのあとを素足で踏み渡るといふ荒行で有名です。実際に見て作った力強さがあると思います。

以上

西東京稲門会俳句サロン(第百六回)
平成三十年二月八日(金) フレンドリ
兼題 犬ふぐり 余寒 ほか五句

日脚伸ぶ友勢ぞろい古戦場

金子まさお

ささくれし魚板吊らるる堂余寒

松尾良久

同窓会別れてよりの余寒かな

◎石井三舟

野水仙ひねもす風の岬かな

松谷富彦

針供養眼鏡の母のお針かな

小嶋長閑

春めくや沓脱ぎ石に泥の跡

○高杉風至

負けて去る土俵の上の余寒かな

滑志田流牧

舞扇余寒の要返しけり

安原千恵

横綱の羽織はピンク節分会

志賀 勉

犬ふぐり平身低頭風しのぎ

三枝 博

地下鉄の席譲りしは雪女

木下石蓆

歩み初め一步に触るるいぬふぐり

梶原松葉

ガリバーのごとく見下ろす犬ふぐり

河村洋子

童女めく卒寿の母や春隣

○片平るみ

からたちの金のたまだよ冬の鈴

金子おくに

「書を捨てよ」修司の叫び冬深し

吉成勝好

脇道に陽を欲しがりて犬ふぐり

辻 直邦

以上十七名

今句会から 辻 直邦さん、水野博司 さんが参加されました。

次回 三月八日(金) 十四時 フレンドリ
兼題 春の水 田楽 ほか計五句

今月の特選句

(天) 野水仙ひねもす風の余寒かな 松谷富彦

伊豆半島の爪木岬の野水仙を思い浮かべました。
岬全てが野水仙、いつも風に揺れ続けているその姿に誰もが
感動を覚えます。

「風の余寒」という簡潔な表現がこの一句を引き締めています。

(地) 同窓会別れて後の余寒かな 石井 三舟

同窓会も年経るにしたがって、会がおわってから来し方 行方
を思うときが多くなるやうに感じます。

「別れてのちの」という中七が言い得て妙です。
季語の余寒がきいている。

(人) 童女めく卒寿の母や春隣 片平 るみ

高齢化社会といわれて久しくなりましたが卒寿とはまことに
おめでたいことです。

だんだんと子供に帰ってゆかれるご母堂の姿が目には浮かびます。

以上

西東京稲門会俳句サロン(第百五回)
平成三十一年一月十二日(金)
兼題 新年一切 ほか計五句

墨の香や新年会の次第書き

金子まさお

マニキュアの手に飛ばされし加留多札

松尾良久

孫帰る静かに二人雑煮かな

石井三舟

とんとこと飴切る音や初大師

松谷富彦

丸々と海を吸ひたる牡蠣食らふ

小嶋長閑

空き缶のからから転げ寒に入る

高杉風至

流れゆく水なき空の放れ風

滑志田流牧

点々と犬踏む跡や霜の畑

志賀 勉

角帯の晴れ着の一日初御空

金子おくに

初富士の夕明りかな墨絵かな

木下石蓐

餡餅の雑煮ほどよくとろけけり

梶原松葉

白朮火を恐る恐ると回しけり

河村洋子

ほのぼのと薔薇色の空淑気満つ

三枝 博

木枯しや仏となりし母の声

片平るみ

北風に頭巾並べて野の佛

安原千恵

かの人の息災を知る賀状かな

吉成勝好

次回 二月八日(金) 十四時 フレンドリ
兼題 余寒 いぬふぐり ほか五句

今月の特選句

◎(天) 丸々と海を吸ひたる牡蠣食らふ

小嶋長閑

全体の句の調べがまことに流麗で心地よい。

「丸々と」「海を吸ひたる」の措辞が心地よく読み手の胸に飛び込んでくる。

大きな句になりました。

○(地) となとこと飴切る音や初大師

松谷富彦

ご存知、川崎大師の名物飴切り。

「となとこ となとこ」と参道に軽快なリズムを

ひびかせている。

参詣の善男善女がそれぞれのリズムを感じながらの初詣である。

○(人) かの人の息災を知る賀状かな

吉成勝好

賀状のなかに「かの人」のそれを見つけて息災を

確かめた心の安らぎ、誰しも経験したことがある

情景。

季語の「賀状」が生きている。

以上

西東京稲門会俳句サロン(第百四回)
平成三十年十二月十四日(金)
兼題 師走 浮寝鳥 ほか五句

浮寝鳥二羽寄り添ひて浮見堂

金子まさお

苔庭の起伏を染めて散紅葉

松尾良久

蘆の影微かに揺れて浮き寝鳥

◎石井三舟

だんだんに妻尖りくる師走かな

松谷富彦

読み返す友の便りや年暮るる

小嶋長閑

湖底には人住みし里浮寝鳥

○高杉風至

門くぐり帽を目深に漱石忌

滑志田流牧

独り居の昼餉の卓着ぶくれて

安原千恵

湘南の海を斜めに冬入日

志賀 勉

踏みしだく朴の落葉の音乾く

三枝 博

視線浴びバスに乗り込む熊手かな

木下石蓐

故郷の話題類張るおほうとう

梶原松葉

だみ声も尖る師走の魚市場

河村洋子

突かれて生死問はるる冬の蜂

片平るみ

とつぷりと柚子たつぷりとしまい風呂

金子おくに

訥々と氷見の漁師の鰯自慢

○吉成勝好

以上十六名

次回 一月十一日(金) 十四時 イングビル
兼題 新年一切 ほか計五句

今月の特選句

(天) 蘆の影微かに揺れて浮き寝鳥 石井 三舟

「浮寝鳥」は冬の水辺の最も好まれる季題の一つであるが、作者は浮寝鳥そのものを詠まずに周囲の風景、すなわち蘆原の蘆のさまを細かく写生することで浮寝鳥を活写している。
風の様子を「ひそかに揺れて」と表現した中七が秀逸。

(地) 湖底には人住みし里浮寝鳥 高杉 風至

ダム開発などでダム湖に沈んだ村の話は、日本列島のそこそこで伝え続けられている。
浮寝鳥のおだやかな風景から遠い昔からこの地で営まれてきた人々の暮らしに想いを馳せる作者。
五七 五の俳句の形から深い詩情が生まれました。

(人) 訥々と氷見の漁師の鰯自慢 吉成勝好

越冬中の氷見は全国に知られた鰯の水揚げ港である。
冬季「鰯起こし」の季語はこの頃に鳴る雷のことを言う。
お正月に欠かせない「鰯」その鰯漁の最盛期の活況が偲ばれる。「訥々と」の表現が印象的である。

以上

西東京稲門会俳句サロン(第百三回)
平成三十年十一月九日(金)

兼題 山茶花 神の留守 ほか五句

古民家の茅葺き替へし石露の花

勉

神の留守般若心経声高に

まさお

姫君を抱きて菊師の口への字

吉成

オリオンの怒涛見下ろす北の海

三舟

旅装解きたちまち長き夜となりぬ

るみ

トンネルを抜けて故里しぐれをり

松葉

行く秋や少し傾ぎし三角点

富彦

薄味の碗の仕上げや寒蜩

長閑

朝寒や膚あらわに武甲山

良久

山茶花の散り敷く道へ遠回り

おくに

木の葉髪ふと忘れふと思ひ出す

風至

巡業の力士ら担ぐ今年米

流牧

冬構へ兼六園の松肥ゆる

千恵

神の留守産土神はどのあたり

博

名刹の白山茶花の白さかな

洋子

次回 十二月十四日(金) 十四時 インゲビル
兼題 師走 浮寝鳥

今月の特選句

(天) 姫君を抱きて菊師の口への字

吉成

菊人形は格好の題材であるが、対象が華やかだけに俗に流れ易い。此の句は人形の姫君を抱いた菊師の表情を描いていて成功された。下五の「口への字」が秀逸。

(地) 行く秋や少し傾ぎし三角点

富彦

作者は通い馴れた近郊の里山を訪ね、いつもの三角点の石標が、少し傾いでいるように思い、「行く秋」を感じ取られた。バランスの取れた語句の配置は流石である。

(人) 名刹の白山茶花の白さかな

洋子

「山茶花」の白に焦点を絞り込んだ一句。上五の「名刹」と「白」の重複が効果的。俳句ならではの単純化の好例である。

西東京稲門会俳句サロン(第百二回)

平成三十年十月十二日(金)

兼題 雁渡し 釣瓶落し ほか計五句

われ歩むつるべ落しの野末かな

金子まさお

豊年の鎮守に腕白相撲かな

松尾良久

一年生一族総出の運動会

石井三舟

阿修羅像秋思の眉を寄せにけり

◎松谷富彦

石たたきたたく間もなく走りけり

小嶋長閑

白帆馳す釣瓶落しをハーバーへ

高杉風至

短艇の沈みし浜や雁渡し

滑志田流牧

金港に釣瓶落しの船出かな

渡辺千恵

雁渡し古城に靡く六文銭

志賀 勉

一本の松茸二合のコメを炊き

金子おくに

厩舎より馬体の匂ひ秋深し

○吉成勝好

団地中吹き荒れてゆく野分かな

木下石蓐

裏木戸の緩みぬし音雁渡し

梶原松葉

防人の歌碑のある島雁渡し

河村洋子

身に入むや豆腐屋喇叭流れ来る

三枝 博

海鳴らし漁り火揺らし雁渡し

片平るみ

次回 十一月九日(金) 十四時 インゲビル
兼題 山茶花 神の留守 ほか五句

今月の特選句

(天) 阿修羅像秋思の眉を寄せにけり 松谷富彦

奈良の興福寺の国宝「阿修羅像」、その修羅の相は多くの詩歌に詠まれてきた。かの会津八一先生も「眉根寄せたるまなざしをまなこに見つつ秋の野をゆく」と「南京新唱」に一首を残されている。阿修羅は戦闘を好む鬼神である。そのすさまじい憤怒の形相を「秋思の眉を寄せにけり」と写生句にまとめられた。「秋思」という季語の力をあらためて感じる。

(地) 厩舎より馬体の匂ひ秋深し 吉成勝好

みちのく遠野の曲り屋での光景を思い出した。作者は東伏見の早大馬術部の厩舎に近いところにお住まいとか。そこで生まれた一句で、厩の敷き藁、馬体の匂いに豊の秋を感じ取った作者である。「馬肥ゆる」という季語があるように馬は秋と縁が深い。

(人) むかし瞽女巡りし野道曼珠沙華 松谷富彦

辞書を繰ると瞽女(ごぜ)三味線をひき歌をうたったりして銭を乞い歩いたためくらの女。「めくら御前」からとある。曼珠沙華は秋彼岸の頃に咲き不思議な感情を抱かせることは「承知の通り」。「ごぜ」の語感がぴったりと合って感慨深い一句が生まれた。

以上

西東京稲門会俳句サロン(第百一回)
平成三十年九月十四日(金)

兼題 秋扇 稲の花 ほか計五句

写経の手暫し休めて秋扇

金子まさお

茶毘のごと流木集ふ厄日かな

松尾良久

秋扇開いてみたが所在なし

石井三舟

片肘を突きし蕪村や秋団扇

松谷富彦

秋うらら手にいっぱい飲み薬

小嶋長閑

秋の野路暮るるけはいの遠汽笛

高杉風至

遠ざかる山なみ潔し稲の花

滑志田流牧

学び舎もかつて四囲には稲の花

○志賀 勉

咲いたよと妻の大声稲の花

金子おくに

重陽や紹興酒一献差し上げん

木下石蔭

忘れえぬ悔い一つあり花茗荷

◎梶原松葉

亡き人の記名くつきり秋扇

河村洋子

鈴虫や鰻老舗の土間で鳴く

三枝 博

故郷は老人ばかりひよんの笛

片平るみ

稲は穂に野面あまねく風渡る

安原千恵

次回 十月十二日(金) 十四時 インゲビル
兼題 雁渡し 釣瓶落し ほか五句

今月の特選句

(天) 忘れえぬ悔い一つあり花茗荷

梶原松葉

「茗荷の食べ過ぎは物忘れを進める」との言い伝えがある。季語の花茗荷に作者は忘れることのない過去の悔い事を思い出された。誰しも終生忘れ得ぬ悔い事の一つ二つはあるのではないか。花茗荷にふとその悔い事を思い出した作者の心中に共感される方も多いのではないか。「悔い一つあり」でまとまりました。

(地) 学び舎もかつて四囲には稲の花

志賀 勉

この一句は東京専門学校(慶応義塾)のセピア色の一葉の写真から浮かんだものと作者の弁。母校 早稲田大学の周りは田圃に囲まれていた。世にいう 早稲田田圃 である。ここから幾多の人材が輩出した

(人) 秋扇詰めの一手の駒を打つ

志賀 勉

将棋の棋士には扇子が良く似合う。季語の「秋扇」と「詰めの手」というつながりからすがすがしさを感じる一句。

以上

西東京稲門会俳句サロン(第百回)
平成三十年八月十日(金)

兼題 雲の峰 八月 ほか五句

球児らは投げ打ち走り雲の峰

早稲の田に酒米の花立ちにけり

熱帯夜外に出て見る大火星

石蹴れば水面に歪む雲の峰

信玄の進めの合図雲の峰

八月の山河や風の鎮魂歌

滝浴びの白装束の早呪文

花鋏鳴らし立つ庭今朝の秋

盆踊りにわか作りの櫓建て

毎日を取つ替え引つ替え夏帽子

八月や火星近づく空仰ぐ

八月や原爆ドームとこしなへ

生身魂乳母日傘の育ちなり

八月や日はかんかんと国破れ

金子まさお

松尾良久

石井三舟

◎松谷富彦

小嶋長閑

○高杉風至

滑志田流牧

安原千恵

○志賀 勉

三枝 博

木下石蓐

梶原松葉

河村洋子

片平るみ

金子おくに

次回 九月十四日(金) 十四時 イングビル
兼題 稲の花 秋扇 ほか計五句

今月の特選句

(天) 石蹴れば水面に歪む雲の峰 松谷富彦

「雲の峰」という季語からは大空に湧き上がる雄大な入道雲のような姿を想像しますが、作者は足元の小石を蹴飛ばして見えた水面の歪んだ雲の峰に注目しました。逆転の発想がトップ賞の一句になりました。

(天) 少年も今は語り部終戦日 松谷富彦

今回は同じ作者によるダブルトップ賞となりました。作者は国民学校三年生の時に終戦の詔勅を聴かれた由、大東亜戦争の最後の世代の語り部という感慨が伝わって来ます。

(地) 秋立つや雲おだやかにたゆたへり 志賀 勉

「秋立つ」という季語には季節の変わり目に関する作者の様々な想いが込められています。もう、天高き秋の雲だよという願望を籠めた措辞が効果的に使われています。

(人) 八月の山河や国の鎮魂歌 高杉風至

「八月」が季題。つかみどころも百人百様のむつかしい季語の代表格ですが、「山河」と「鎮魂歌」という措辞と、八月の山河やの切れ「や」が絶妙の配置で印象的な大きな俳句にまとめられました。以上

西東京稲門会俳句サロン(第九十九回)
平成三十年七月十三日(金)

兼題 道をしへ 風鈴 ほか五句

風鈴を吊るしてほぐす束ね髪

○金子まさお

穂高見ゆ峠に齧る青林檎

松尾良久

夕暮れをそぞろ歩きの浴衣かな

石井三舟

ジャンヌダルク思いつ庭の毛虫焼く

松谷富彦

波打つや風鈴売りの竿さばき

小嶋長閑

郷愁を貝風鈴が呼び起こす

高杉風至

水着干す離島の空の広さかな

○滑志田流牧

小坊主に似たる風鈴庫裡に吊る

安原千恵

風鈴市百の音色の混じりけり

志賀 勉

垣根からぬつと顔出し七変化

三枝 博

朝涼や路地の清掃始まりぬ

木下石蔭

蟹跳ぬる入江に潮の滲み来る

梶原松葉

亡き夫と夢での逢瀬明け易し

河村洋子

道をしへ遙か遠くに黄泉の国

◎片平るみ

石蹴りつ野中の家へ道をしへ

金子おくに

次回 八月十日(金) 十四時 イングビル
兼題 八月 雲の峰 ほか計五句

今月の特選句

(天) 道をしへ遙か彼方に黄泉の国 片平るみ

今月の兼題「道をしへ」は小さな甲虫で、人が近づくと前へ一米ほど飛んで振り返るような仕草をするのが、人を案内するように見えるのでその名が生まれた。

下五句に「黄泉の国」を入れておおいに読者の想像を掻き立てる一句に仕上げている。

(地) 風鈴を吊るしてほぐす束ね髪 金子まさお

昨今はあまり見かけなくなった風鈴であるが夏の風物詩に欠かせない小道具の一つである。

「吊るしてほぐす」という表現で広重描く浮世絵のような艶な美人の動作が見えて来る。

(人) 水着干す離島の空の広さかな 滑志田流牧

遠い南の島へ旅行に行かれた作者。本土を遠く離れた絶海の孤島であらためてその空の広さにさまざまな思いを感じられたのではないだろうか。

水着干すという平凡な日常の営みと一転して大宇宙を感じる大空の対比が効果的です。

(話題句) 小坊主に似たる風鈴庫裡に吊る 安原千恵

お寺の庫裡に吊るした風鈴。その形は小坊主そっくり、ありありと光景が目に見えます。

以上

西東京稲門会俳句サロン(第九十八回)
平成三十年六月八日(金)
兼題 万緑 五月闇 ほか計五句

万緑や秩父札所の鐘一打

○金子まさお

新茶汲みあの世この世をもてなしぬ

◎片平るみ

青田飛ぶ新幹線の帰郷かな

石井三舟

日焼け止め塗って客待つ女傭夫

○松谷富彦

節々に季節の痛み梅雨寒し

小嶋長閑

冷酒や時に涙の味がして

高杉風至

面打つ雨のつぶてや枇杷たわわ

滑志田流牧

山法師の花打ち仰ぐ遠忌かな

渡辺千恵

切通し抜け万緑の鎌倉路

志賀 勉

アメフトの選手の涙五月闇

金子おくに

苗札に日付を書きてゴーヤかな

木下石蔭

余余命告げられし人訪ふ竹の秋

梶原松葉

街灯に影逞しき新樹かな

三枝 博

「人体展」出でて上野の五月闇

松尾良久

次回 七月十三日(金) 十三時 コール田無
兼題 道おしえ 風鈴 ほか五句

「今月の特選句」

(天) 新茶汲みあの世この世をもてなしぬ 片平るみ

中七の「あの世この世」という詞が季題の「新茶」と響き合って
独特の雰囲気を醸し出しています。
仏壇に新茶を供えてご先祖さまとしばしお話をされている作者です

(地) 万緑や札所の鐘一打 金子まさお

秩父巡礼の人気札所に音楽寺があります。
この高みにあるお寺から打ち出された梵鐘の響きが
万緑の秩父盆地に拡がってゆく、「鐘一打」という
表現に力強さがあります。

(人) 日焼け止め塗って客待つ女俵夫 松谷富彦

作者は浅草雷門の近くで珍しい女性の人力車を見かけました。
一休みしてお化粧をしているその姿を「日焼け止めを塗って
客待つ」と写生しました。浅草界限の夏の一景ががくつきりと
浮かび上がりました。

話題になった句

アメフトの選手の涙五月闇 金子おくに

御存じ、日大、関学のアメフトゲームのタックル問題はそのシーンが
お茶の間に流れて、大きな話題になりました。
五月闇という俳句の季語が効果的であるか否かで評がが分かれた一句。

西東京稲門会俳句サロン(第九十七回)
平成三十年五月十一日(金)

兼題 新樹 薫風 ほか計五句

風薫る友のバリトン耳朶揺らす

金子まさお

ふるさと村六坪ほどの麦の秋

松尾良久

ベランダに鯉幟あり大志あり

石井三舟

雲水の 一列に行く聖五月

松谷富彦

黒南風や障子の棧の綿埃

小嶋長閑

箸先に透く糸づくり夏座敷

高杉風至

出港や五月の風を欲しいまま

滑志田流牧

新茶汲み夫婦の午後を懐かしむ

渡辺千恵

薫風や堅き三和土の学問所

志賀 勉

薫風や目に映るもの皆あらた

金子おくに

子供の子の日の子等みんな育ちけり

木下石蓐

木道を譲り譲られ水芭蕉

○梶原松葉

葉桜や被災地持てる底力

○河村洋子

花は去り長堤朱夏へまつしぐら

三枝 博

石仏の百の微笑み新樹光

◎片平るみ

空を指す白神山地ぶな新樹

藤田貞夫

次回 六月八日(金) 十四時 ふれんどり
兼題 万緑 五月闇 ほか五句

今月の特選句

(天) 石仏の百の微笑み新樹光

片平るみ

みずみずしい新樹の野面。そこに鎮座する野の佛に百の微笑みを見た作者です。百体かどうかではなく新樹の心象風景を下五の「新樹光」で表現しました。

(地) 木道を譲り譲られ水芭蕉

梶原松葉

「夏が来れば思い出す」尾瀬沼に水芭蕉の季節が到来です。中七の「譲り譲られ」の表現が秀逸。

(人) 葉桜や被災地持てる底力

河村洋子

東北大震災から七年になります。
葉桜には絢爛たる花季を終わったその木の生命力を強く感じますが、それを被災地の底力と言い切った潔さが持ち味の一句です。

「話題になった一句」

崩れゆく文明に似て赤き薔薇

滑志田流牧

スケールの大きな一句。

なんとなく忘れられない一句。

「薔薇」俳句の底の深さを感じました。

以上

西東京稲門会俳句サロン(第九十六回)
平成三十年四月十三日(金)
兼題 春惜しむ 百千鳥 ほか計五句

手術待つ窓の枝枝百千鳥

金子まさお

春彼岸骨董市に佛立つ

松尾良久

カメラ手にそぞろ歩きや春惜しむ

石井三舟

海鳴りの聞こゆる駅や春愁ひ

松谷富彦

御佛も眠くなりたり春の雲

小嶋長閑

百千鳥一羽加はり一羽去る

○高杉風至

桜さくら何事もなき退職日

滑志田流牧

チューリップうち置く鉢の芽吹きかな

渡辺千恵

日溜りの縁の微睡み春惜しむ

志賀 勉

蒼天もたちまち白し花吹雪

金子おくに

鳥雲に秩父山並みはるかなる

木下石蓐

春耕の乙女に似合ふつなぎ服

梶原松葉

石庭の筋目を数へ春惜しむ

○河村洋子

桜咲く一番乗りは脇芽から

三枝 博

すべり台待つ子に桜吹雪かな

◎片平るみ

仄暗き病床の窓春惜しむ

藤田貞夫

次回 五月十一日(金) 十三時半 ふれんどり
兼題 新樹 薫風 ほか五句

今月の特選句

(天) すべり台待つ子に桜吹雪かな 片平るみ

俳句は有季定型、季語の代表は 雪 月 花 とされています。
今月句会のトップ賞のこの一句については何の説明もありません。

(地) 百千鳥一羽加はり一羽去る 高杉風至

「百千鳥」を歳時記では「いろいろの春の小鳥が、野山や森などで群鳴していること」とあります。
一羽加わり一羽去っても百千鳥、というユーモアを感じる手練れの一句です。

(人) 石庭の筋目を数へ春惜しむ 河村洋子

京都での旅吟、有名な虎の子渡し石庭でしょうか。
ゆったりと過ごした旅のひと時を「惜春」の一語でまとめて読み手の心情に訴えるものがあります。

「話題になった一句」

卒業す校歌の山に一礼し 片平るみ

「校歌の山」という表現が極めてユニークです。
早稲田大学校歌「都の西北」には山は入っておりません。
以上

西東京稲門会俳句サロン(第九十五回)
平成三十年三月九日(金)

兼題 春嵐 水温む ほか五句

雛収め昭和のままの顔でよし

金子まさお

梅探る鎮守に円き力石

松尾良久

水温むあちらこちらに泥煙

石井三舟

ものの芽の鼓動聞こゆる野道かな

◎松谷富彦

女手で守りしのれん宵の春

小嶋長閑

吊橋の向こうに駅や鳥雲に

高杉風至

春の土踏んで縛られ地藏かな

滑志田流牧

春雪や首すくめたる猫二匹

渡辺千恵

深大寺汲む閼伽水の温みけり

志賀 勉

紅梅の香ほのかに蔵の街

三枝 博

カーリング北見の町を春嵐

木下石蔭

整ひし雪吊解かる日も間近

梶原松葉

塗り箸をするりとかはす白魚かな

○河村洋子

水温む仮校舎より九九の声

○片平るみ

水ぬるむ豆腐すくひし媪かな

金子おくに

次回 四月十三日(金) 十四時 フレンドリー
兼題 春惜しむ 百千鳥 ほか計五句

今月の特選句

(天) もの芽の鼓動聞こゆる野道かな 松谷富彦

一斉に芽吹き始めた「ものの芽」を擬人化して息吹の鼓動ととらえました。大きな句になりました。待ちかねた春の到来を喜ぶ気持ち伝わってきます。

(地) 水温む仮校舎より九九の声 片平るい

仮校舎に東北の大震災の被災地を思い浮かべました。あるいは小さな山の分校か。「九九」は誰しも経験した小学校の頃の懐かしい思い出。効果的に使われています。

(人) 塗り箸をすりりとかはす白魚かな 河村洋子

「白魚」は しらお と読みます。春になると川や湖にのぼってくる。春を告げるのが白魚の四つ手網漁です。その踊り食いの様子がユーモラスな一句になりました。

以上

西東京俳句サロン(第九十四回)
平成三十年二月九日(金)
兼題 余寒 薄氷 他

球音に一軍目指す春隣

金子まさを

探梅の一輪を得て歩を返す

◎渡辺千恵

手水場の薄氷丸く溶けにけり

○小嶋長閑

化野の佛を濡らす春時雨

志賀 勉

夫が掻き妻が舵取る蜆舟

○ 松谷富彦

僧坊に魚版ささくれ冴返る

松尾良久

一幕のゆめの如くや雪の朝

石井三舟

住み慣れて雪の路地道細く搔く

梶原松葉

孫悟空乗つていそがな春の雲

三枝 博

上げ潮の千波万波や風光る

高杉風至

残雪に駆け寄る靴の小さきかな

金子おくに

塵一つなき回廊や雪しんしん

滑志田流木

凝視する薄氷といふ小宇宙

河村洋子

節分や但馬屋の豆歳ほどに

木下石菴

次回

三月九日(金) 午後一時半 コール田無

兼題 春嵐 水温む 他計五句

今月の特選句

(天) 探梅の一輪を得て歩を返す 渡辺千恵

二月は梅のシーズン「一輪ほどの暖かさ」で咲初めた梅を題材にすることが多い。一輪を得た探梅行の満足感が溢れています。

(地) 手水場の薄氷丸く溶けにけり 小嶋長閑

「うすごおり」はむつかしい季題です。手水という懐かしい言葉と丸く溶けたよという写生をそのまま下五に持ってきたことで読み手にいろいろなことを想像させる味のある俳句になりました。

(人) 夫が搔き妻が舵取る蜺舟 松谷富彦

宍道湖の蜺は瀬田の蜺と共に全国に知られています。夫婦分業でのシジミ採りは少なくなつたようですが蜺舟の写生で春の到来とともに変わりゆく人間の営みに思いを馳せさせる一句。

西東京稲門会俳句サロン(第九十三回)
平成三十年一月十二日(金)
兼題 淑気 寒一切 ほか計五句

晷替え済ませつくづく妻の顔

金子まさお

奥の院目指すリヌクに破魔矢挿す

松尾良久

ゴールデン街店の奥まで淑気満つ

石井三舟

柏手に鳴き龍応ふ淑気かな

○ 松谷富彦

三食に続く葉や冬ぬくし

小嶋長閑

古傷のむしろ懐かし老いの春

高杉風至

月山を輪の中に入れ鷹一つ

◎ 滑志田流牧

膨らみて梢の色に寒雀

渡辺千恵

冬涛や流れ着きたる北の舟

志賀 勉

神棚も仏間も拭きて淑気かな

金子おくに

墨継ぎの力のありし吉書かな

木下石菴

澄み渡る陸奥の空淑気颯つ

梶原松葉

屋久杉の盆の木目も淑気かな

○ 河村洋子

凍み空に遮るはなしスーパームーン

三枝 博

次回 二月九日(金)十四時 コール田無
兼題 余寒 薄氷 ほか五句

今月の特選句

(天) 月山を輪の中に入れ鷹一つ 滑志田流木

新春句会にふさわしい堂々たる一句が巻頭に選ばれました。
奥の細道でかの芭蕉も訪れた月山。
おめでたい季語とされる鷹を配してパーフェクト。

(地) 柏手に鳴き龍応ふ淑気かな 松谷富彦

日光東照宮で有名な鳴き龍。天に昇る龍を配して季語の
「淑気」を身近の一句にしたてられました。

(人) 屋久杉の盆の木目も淑気かな 河村洋子

「淑気」はイメージが結びにくいむつかしい季題で今回は全員が
苦心をした兼題でした。

「屋久杉のお盆」の木目に淑気を感じた作者に脱帽です。

「問題句」 冬濤や流れ着きたる北の舟 志賀 勉

平成三十年もニュースの関心事は北朝鮮問題です。
時事俳句はむつかしいテーマですが、時局を対象に取り組む姿勢は
稲門俳句の器の大きさを現していると思います。

西東京稲門会俳句サロン（第九十二回）
平成二十九年十二月八日（金）
兼題 年の市 隙間風 ほか計五句

忘れたきこと数多ありすきま風 金子まさお

吹越や谷川岳の耳尖る 松尾良久

寒暁や遠くて近き真珠湾 石井三舟

ブーメラン凧連れて戻りけり ○松谷富彦

小春日の雲と旅する車窓かな ◎小嶋長閑

手相見の手持ぶさたの歳の市 ○高杉風至

都鳥とともに鐘聴く冬はじめ 滑志田流牧

祝ひごとけふ寒菊の群れて咲く 渡辺千恵

法話聴く背にひと筋の隙間風 志賀 勉

夫がいて手ぶらが楽し年の市 金子おくに

陶器手に挨拶をする年の市 木下石蔭

年の市鋤鎌にぶき灯をかへす 梶原松葉

まほろばの大和三山冬がすみ 河村洋子

冬うらら老人体操かろやかに 三枝博

次回 一月十二日(金)会場 コール田無
兼題 寒一切 淑氣 ほか計五句

今月の特選句

(天)小春日の雲と旅する車窓かな

小嶋長閑

初冬の太平洋岸に訪れる無風の暖かい日和は小春と呼ばれ厳しい寒さを前にした
一瞬の安らぎをもたらしてくれませう。
おおらかな詠みぶりの好句です。

(地)手相見の手持ちぶさたの歳の市

高杉風至

あわただしい年の市の雑踏の中に手相見がぼつんといつもの場所にすわっている。
「手もちぶさた」という中七の表現がなんともいえない味わいを醸し出しています。

(人)ブーメラン風連れて戻りけり

松谷富彦

ブーメランを擬人化して木枯しを手元に連れてもどってきたという見立てで
ユーモラスにまとめた手練れの一句。
思わずなるほどと納得。

『話題句』

寒暁や遠くて近き真珠湾

石井三舟

今月の句会開催は十二月八日、奇しくも太平洋戦争の真珠湾攻撃の日にあたりました。
句会のめんばーの年齢も様々ですがこの一句についてあの日の思い出を語り会いました。
「遠くて近き」という表現が昨今の世界情勢を暗示しているようです。

西東京稲門会俳句サロン(第九十回)
平成二十九年十一月十日(金)

兼題 冬初め 山茶花 ほか計五句

初冬に目覚ましの音膨らませ

金子まさお

黄落や垂乳根高き大銀杏

松尾良久

厳戒の都心足早や冬立つ日

石井三舟

山茶花や十戸の里に郵便車

◎松谷富彦

残る虫最後の夜を閉じにけり

小嶋長閑

事後に知り喪主へ書く文もがり笛

高杉風至

而して水琴鳴れり初時雨

滑志田流牧

森閑と手習い教室百舌日和

渡辺千恵

初紅葉夕やけ小やけの里の歌

志賀 勉

耳鳴りも遠き鈴の音冬に入る

○金子おくに

端溪のまあるい海や冬はじめ

○木下石蔭

木隠れに瀬音激しき野分あと

梶原松葉

初島のお初の悲恋つはの花

河村洋子

次回 十二月八日(金)会場 障害者支援センター
兼題 年の市 隙間風 ほか計五句

今月の特選句

(天) 山茶花や十戸の里に郵便車 松谷富彦

奥多摩や秩父の山間には限界集落と呼ばれる少人数の集落が点在していますが、人里と山里の暮らしを結ぶ赤い郵便車と山茶花を配した一句に仕立てられました。「十戸の里」という中七が生きています。

(地) 端溪のまあるい海や冬はじめ 木下石菫

中国の銘硯、宇宙を現す硯のへこみを海に見立てて「まあるい」というやわらかな表現が冬のはじめの気分を現しています。

(人) 耳鳴りも遠き鈴の音冬に入る 金子おくに

年齢を重ねると自分の耳鳴りが気になりますが、これも玉を転がすような鈴の音に聞こえるという初冬の心象俳句になりました。

(人) 隣の客神かも知れぬ神在月 松谷富彦

全国の神々が出雲に集まるといわれる神無月、出雲では神在月になります。舞台が出雲という見立てであれば、この句のように隣の人がひよっとすると神様かも、というこのようなユニークな一句が生まれました。

西東稲門会俳句サロン(第九十回)
平成二十九年十月十二日
兼題 虫一切 柿 ほか

秋嶺のことごとく見ゆ山日和

松尾良久

少年の頃は登りてもぎし柿

高杉風至

山里や入日に染まる柿すだれ

松谷富彦

虫の音やグラスに揺るるブランデー

石井三舟

何気なく二つ寄り添ふ枝の柿

金子まさお

どの柿も枝鈴なりに能登暮るる

金子おくに

運動会靴の色にて探す吾子

高橋 薫

ここからは山の辺の道柿日和

◎河村洋子

小春日の下駄の鼻緒の緩み哉

滑志田流牧

秋高し夢を叶へしトキワ荘

○志賀 勉

鱗雲ゆるり流れて富士の峰

木下石露

鳳仙花弾けて今朝の目覚めかな

○小嶋長閑

近道の踏みしめられて木の実かな

梶原松葉

次回

十一月十日(金) 十三時半

障害者総合支援センター「フレンドリ」

兼題 冬初め 山茶花 他計五句

「今月の入選句」

(天) ここからは山の辺の道柿日和 河村洋子

古都奈良の山の辺の道での旅吟です。
自然にすらすらと出た調べで「柿日和」の季語が
ぴったりと決まっています。

(地) 秋高し夢を叶へしトキワ荘 志賀 勉

九年度の散策の会「椎名町から東長崎」に参加された際の
吟行句です。
漫画ファンにとって聖地とされる「トキワ荘跡地」の
モニュメントが公園の一面にあり手塚治虫、赤塚不二夫
等のサインが飾られています。

(人) 鳳仙花弾けて今朝の目覚めかな 小嶋長閑

鳳仙花の花言葉は「私に触れないでください」
熟すと鞘の中から種子が飛び出す秋の草花です。
つまべに つまくれない の呼び名を持っています。
日常生活の中で一句が生まれました。

以上

西東京稲門会俳句サロン(第八十九回)
平成二十九年九月八日(金)
兼題 鳥渡る 月一切 ほか五句

アリゾナの月サボテンに突きささり

◎金子まさお

大座布団媪小さき月見かな

松尾良久

鳥渡る岬の崖に白き波

石井三舟

大空に見えぬ道あり鳥渡る

松谷富彦

島唄に慣れぬ手拍子月の宴

小嶋長閑

峠路の分岐に地藏小鳥来る

高杉風至

西行の隣に月の客となる

滑志田流牧

露草やこの傾きの果てしなき

渡辺千恵

ためらいし背中押されて踊りの輪

○志賀 勉

先生と子ら帰る道鳥渡る

金子おくに

月天心ビルの谷間をてらしけり

○木下石蔭

消えかかる伝言板や秋の風

高橋 薫

月白や峠の茶屋の灯を点す

梶原松葉

復興の槌音のなか鳥帰る

河村洋子

次回 十月十三日(金) 十四時 田無市庁舎202号室
兼題 虫一切 柿 ほか計五句

(天) アリゾナの月サボテンに突きささり 金子正男

今月の季題は「月」、伝統的な季語の代表格である。
当句会ではベテランから初心者までの幅が広い。
並の句会ではトップになりにくいこの一句が選ばれた
俳句サロンの眼力はやはり稲門会であると感じた次第。
会員同志のメール交換から一句を作られたと作者の弁
であった。

(地) 月天心ビルの谷間を照らしけり 木下石蔭

スケールの大きな一句。
天に対応する大都会のビル。天心という詞を使って
その谷間を照らすさまを活写しました。

(人) ためらいし背中押されて踊りの輪 志賀 勉

踊ろうかどうかしようか、その一瞬背中を押されて
踊りの輪の中に入っていった。
誰もが経験をした故郷の盆踊りの思い出の一句です。

『問題句』

西行の隣に月の客となる 滑志田流牧

この一句、今句会では選がありませんでしたが、句会では
西行の扱いを巡っているいろいろな意見が出ました。

しかし、今宵「月見の客」となった自分には隣り合う
月見の客はみなかの西行法師に思えるよ

という作者の気持ちはそくそくと伝はってくるのです。

以上

西東京稲郭公の門会俳句サロン（第八十八回）

平成二十九年七月十四日（金）

兼題 金魚 涼し ほか計五句

軸揺れて墨痕涼し忍一字

金子まさお

耳飾り揺らしつつ食む大西瓜

松尾良久

大和なる金魚田のある城下町

藤田貞夫

盤上の若武者破れ夏の夜

石井三舟

石庭の白砂涼しき筋目かな

◎松谷富彦

水草の揺れて癒しの金魚かな

小嶋長閑

時の鐘涼しく響く蔵の町

○高杉風至

飛び魚の一躍光の粒となる

○滑志田流牧

鶴鴿の止り木に向く苑の椅子

渡辺千恵

梅雨晴間水琴窟の澄みし音

志賀 勉

縄文の史跡かすめて夏燕

金子おくに

すり鉢に雑魚と味噌入れ冷やし汁

木下石蔭

役目終へ郭公の鳴く街に住む

高橋 薫

蒲の穂やお伽話を知る知らぬ

梶原松葉

下町の路地活気づく金魚売

河村洋子

次回 九月八日(金)会場 障害者支援センター
兼題 月一切 鳥渡る ほか計五句
今月の特選句

(天)石庭の白砂涼しき筋目かな

松谷富彦

今月の兼題は 涼し。

この一句、石庭 白砂 筋目と作者の視線をたどりつつ涼しさを
感じさせる組み立てになっています。

「筋目かな」の下五 が句を引き締めています。

(地)時の鐘涼しくひびく蔵の町

高杉風至

武州川越は観光客に大人気の蔵の町ですが、そのシンボルは
時の鐘。

甍の波の上をひびいてくる鐘の音に涼しさを感じ取っている
作者です。

(人)飛び魚の一躍光の粒となる

滑志田流牧

ふだんお目にかかれない光景の旅吟。

作者は九州薩摩の海で見た景を「一躍光の粒となる」という
独特の感性でしっかりと一句に残されました。

蒲の穂やおとぎ話を知る知らぬ

梶原松葉

「蒲の穂」と聞くと大国主の命が因幡の白兔を助けるおとぎ話を
思い浮かべる世代は少なくなりました。

この一句の「知る知らぬ」という表現に吟行でのメンバーの
長老格になられた自己像が浮かび上がりました。

西東京稲門会俳句サロン(第八十七回)
平成二十九年六月九日踏ん張る丸
兼題 梅雨一切 水馬 ほか

みずすまし己が重さの水凹め

松尾良久

バーで聞く「雨に歌えば」梅雨も良き

高杉風至

あめんぼう雲を揺らして遊びをり

松谷富彦

この夏を越せるかと母独り言

石井三舟

水面の雲に踏ん張るあめんぼう

金子まさお

遠郭公湧水沿いの散歩道

藤田貞夫

尺取りのしがみつきたる菜を洗ふ

◎金子おくに

戦への波ざわざわと山瀬かな

高橋 薫

ふるさとの山迫りくる夏野かな

◎河村洋子

飯盛の女の墓や滴れる

滑志田流牧

境内の水がめ狭し水すまし

志賀 勉

君逝きてひとり味ふ心太

渡辺千恵

梅雨入りの宵の西方星一つ

木下石露

飼い犬の引きの強さや梅雨晴間

小嶋長閑

ぼうふらの鉢ためらわず打ち伏せり

◎梶原松葉

次回

七月十四日(金) 十四時

障害者総合支援センター「フレンドリ」

兼題 涼し 金魚 他計五句

「今月の入選句」

今月は女流三人の揃い踏みとなりました。

(天)

ぼうぶらの鉢ためらわず打ち伏せり 梶原松葉

漢字で「子子」夏の嫌われ者、蚊の幼虫の姿を見ることも
少なくなりました。中七のためらわずという言葉に作者の
強い意志が感じられます。

(地)

尺取りのしがみつきたる菜を洗ふ 金子おくに

市民農園での光景でしょうか。
尺取り虫のあの独特の姿態が目には浮かびます。
ありのままの写生句です。

(人)

ふるさとの山迫り来る夏野かな 河村洋子

女流らしいこまやかさが感じられる一句です。
夏休みの帰省の時の感慨、故郷の山川草木はかぎりなく
なつかしい。

若楓桐生の古寺へカメラ向け 高橋 薫

四月に亡くなった石井唯夫さんへの弔句。
趣味の写真と俳句のコラボを楽しんでおられた一景です。
以上

西東京稲門会俳句サロン(第八十六回)

平成二十九年五月十二日(金)

兼題 若葉 初鰹 ほか五句

黒潮としようがを載せて初鰹

○金子まさお

月山を窓に夏炉の客座かな
蔦若葉小川の岸を飾り初め
参道をのぼりつめれば躑躅燃ゆ
消しゴムで消えぬ訛りや修司の忌
膝小僧風切る径の若葉かな
一望の棚田のひとつ植糸はじめ
青嵐今困民党の鐘鳴れり
鋏痕のしるき竹の子ころがされ
桜蕊ふる困民党の扱しり寺
丘陵の緑に絡む藤の花
歯にやさし筍飯の茹で加減
入学児迎えいらぬと手を離し
民宿の厚き切り身や初鯉

◎松尾良久
藤田貞夫
石井三舟
○松谷富彦
小嶋長閑
高杉風至
滑志田流牧
渡辺千恵
志賀 勉
金子おくに
木下石路
高橋 薫
○梶原松葉

次回 六月九日(金) 会場 障害者支援センター
兼題 梅雨一切 水馬 ほか計五句

「今月の特選句」

(天) 月山を窓に夏炉の客座かな

松尾良久

堂々たる発句。芭蕉の「奥の細道」にも登場する月山。
出来すぎている感じですが、春スキーで出かけた民宿で
出された山菜の味を忘れることはできません。

(地) 消しゴムで消えぬ訛りや修司の忌

松谷富彦

御存じの寺山修司の忌を詠んだ一句。青森出身の修司は演劇
をはじめ文芸の多くの分野で活躍した早稲田大学の先輩でも
あります。その俳句も多くの作品が愛唱されています。
この一句、上五の消しゴムを持ってきたことでユニークな一句
になりました。

(人) 民宿の厚き切り身や初鯉

梶原松葉

(人) 黒潮としようがをのせて初鯉

金子まさお

今月の兼題は 青葉と初鯉で

「目には青葉山ほととぎす初かつお」の一句が人口に膾炙
されているだけに作りにくかったと思われます。
単純明快に身辺のただ事を仕立てた俳句に票が集まりました。

以上

西東京稲門会俳句サロン(第八十五回)
平成二十九年四月十四日(金)
兼題 囀り 日永 ほか計五句

花吹雪目薬さして立ち向かふ

金子まさお

城門に衛士の交替花の昼

松尾良久

園庭の幼児の声や百千鳥

藤田貞夫

花の雲抜けてすつくと富士の峰

石井三舟

超絶の燕返しや地に五寸

松谷富彦

花の闇白きうなじに手櫛かな

○小嶋長閑

贈られし杖に春の野巡りけり

高杉風至

農鳥を高きに潜め春霞

滑志田流牧

結界の橋をくぐりて花筏

渡辺千恵

永き日や亀の甲羅も乾きをり

志賀 勉

手鞠さす幾何学模様日永かな

金子おくに

切り張りの漱石の猫読む日永

○木下石路

井の頭スワン漕ぐ脚春の風

高橋 薫

遭難の供花に春雪積りゆく

梶原松葉

船頭の間のびせし唄日永かな

◎河村洋子

次回 五月十二日(金)会場 障害者支援センター
兼題 若葉 初鰹 ほか計五句

「今月の特選句」

(天) 船頭の間のびせし唄日永かな

河村洋子

「短日」の後の春の日の「日永」は四季を持つ日本人の
生活実感から語り継がれた季節であろう。

渡し舟か運河めぐりか、船頭さんは女性かもしれない。

(地) 切り張りの漱石の猫読む日永

木下石路

明治の文豪漱石の人氣は高い。「吾輩は猫である」の

新聞記事のスクラップを読んでいる作者のゆったりとした時間の過ごし方はうらやましいかぎり。「日永」がぴったりと決まっている。

(人)

花の闇白きうなじに手櫛かな

小嶋長閑

歌麿の浮世絵を見るような艶な一句。

出来すぎではないかとみんなに冷やかされて作者は照れていました。

(人)

超絶の燕返しや地に五寸

松谷富彦

燕が地上すれすれのところまで反転して翔び交う一瞬の動きをとらえた一句で技巧的な構成を持っています。

遭難の供花に春雪積もりゆく

梶原松葉

三月に那須岳で栃木県高校山岳部の合同訓練中に折からの春雪の雪崩により八名の若い生命が失われました。

その追悼句。春の雪がなお降り積もる。合掌。

西東京稲門会俳句サロン(第八十四回)

平成二十九年三月十日

兼題 花一切 白子 風船 ほか

昭和史に反乱の章春の雪

松尾良久

筏師の瀬にさす棹や風ひかる

高杉風至

帯解けばひとひら舞ひぬ花疲れ

松谷富彦

雛祭り祖母もスマホを操れり

石井三舟

妻折りし紙雛皆同じ顔

金子まさお

安曇野やげんげ田色を鋤きこめり

◎藤田貞夫

潮騒をとどめて碗のしらすかな
手を離れ風船点になりし空
水温む詩歌句を生みし国に生き
せせらぎの結界たどる難送り
解禁の網にずしりと初白子
囀りのついと降りくるあしたかな
白子舟大きく旋回海を呑む
歩をゆるめ一人万朶の花に酔ふ
越中の葉屋先ずは紙風船

○金子おくに
高橋 薫
河村洋子
滑志田流牧
○志賀 勉
渡辺千恵
○木下石路
小嶋長閑
梶原松葉

次回

四月十四日(金) 十四時

障害者総合支援センター「フレンドリ」

兼題 日永 囀 他計五句

「今月の入選句」

(天) 安曇野やげんげ田色を鋤き込めり 藤田貞夫

今では紫雲英田を見ることも少なくなりました。

信州安曇野に広がるげんげの田の耕しの景でその春の色

ごと鋤きこまれた大きな景色が見えてきます。

安曇野から見えるアルプスの峰々はまだ真っ白です。

(地) 白子舟大きく旋回海を汲む 木下石路

今月の兼題は「白子」

湘南海岸で「白子料理」を食べられた方も 多いことでしょう。

下五の「海を汲む」で句柄が大きくなりました。

(人) 潮騒をとどめて碗のしらすかな 金子おくに

「しらす」の一碗に集中、窓の外の潮騒がきこえてくるような

女流らしいこまやかさが感じられる一句です。

(人) 解禁の網にずしりと初白子 志賀 勉

白子漁は解禁日が決められています。

それを上手に生かして上五に使いました。

西東京稲門会俳句サロン(第八十三回)

平成二十九年二月九日(金)

兼題 立春 猫の恋 ほか五句

文士村主なき書斎梅早し
わしづかみしては豆撒く相撲取
春立ちて埋けし大根掘り起こす
散髪を終えて出づれば春の昼
枝移り調子あげゆく初音かな
春立つやすると抜けし蟹の脚

金子まさお
○松尾良久
藤田貞夫
石井三舟
松谷富彦
◎小嶋長閑

膝に来て受けし傷紙む恋の猫
春寒や雀らつどふ文士村

高杉風至
滑志田流牧

日当たりの縁に寒餅反り返る

○渡辺千恵
志賀 勉

春立ちぬ北斗の星の薄明り

金子おくに

冬晴れや眼下の海は藍の襞

木下石路

恋知らぬままに逝きしか我が家猫

高橋 薫

茶筒にはいつも茶のあり日脚伸ぶ

梶原松葉

福豆に齡かぞえて掌に溢る

河村洋子

立春の光の跳る大甍

次回 三月十日(金) 会場 障害者支援センター

兼題 花一切 白子 風船 ほか計五句

「今月の特選句」

(天) 立春が今月の兼題。蟹は夏の季語ですがこの句の場合 小嶋長閑

は蟹の脚で松葉蟹など冬の蟹を思い浮かべるので 季重なりとは
なりません。中七が秀逸、題材のユニークさがポイントです。

(地) 日当たりの縁に寒餅反り返る 渡辺千恵

なんでもない昭和の普通の景ですが限りなく懐かしい気分
にさせてくれる一句です。「反り返る」が写生の神髄です。

(人) わしづかみしては豆撒く相撲取 松尾良久

稀勢の里が府中の大國魂神社で豆撒きをしました。

ニユース性で入賞の一句です。

俳句サロンの直前に同好会の「散策の会」の大森貝塚から馬込文士村
への散策会に俳句会員5名が参加して梅見を試みました。

今月の投句より拾ってみました。

文士村主なき書斎梅早し 金子まさお

春寒や雀らつどふ文士村 滑志田流牧

春寒し坂また坂の文士村 志賀 勉

以上

西東京稲門会俳句サロン(第八十二回)

平成二十九年一月十三日(金)

兼題 新年一切 寒卯 ほか五句

元旦に国旗はためく軒一つ 金子まさお

読初にほどよき史書の厚さかな 松尾良久

初声の真紅なる実には群がり来 藤田貞夫

三代の笑顔で祝ふ雑煮かな 石井三舟

どの部屋も少し反りたる新暦 ◎松谷富彦

鉛切りの軽ろきリズムや初大師 ○小嶋長閑

一病を持ち朝夕に寒卵
大根の自在に煮ゆる外は雪
山門の松葉霜ごと掃かれけり
笹鳴きの移ろふ藪を目で追へり
階段を昇り尽くして初日の出
玄関の定位置桌の新曆
鋸入れて檜の香り冬木立
納経所に回り道あり福寿草
西陣の路地のふくらむ手鞠唄

高杉風至
滑志田流牧
○渡辺千恵
志賀 勉
金子おくに
木下石路
高橋 薫
梶原松葉
河村洋子

次回 二月十日(金) 会場 障害者支援センター
兼題 立春 猫の恋 ほか計五句
「今月の特選句」
(天) どの部屋も少し反りたる新曆 松谷富彦

「新年一切」は材料がありすぎてかえって一句になりにくいものですが
初句会では十五名の五句投 五句選の七十五句のうち七票を得てダントツ
の成績でした。次の二句も同じ作者の高点句です。
あばら骨出して武甲の山眠る 富彦
喧嘩独楽弾き飛ばしてなほ余裕 富彦

(地) 飴切りの軽ろきリズムや初大師 小嶋長閑
お大師さんの参道での光景、中七のリズムというかカタカナの響きが
絶妙です。

(人) 山門の松葉霜ごと掃かれけり 渡辺千恵
霜という季題もなかなかまとめにくい。
山門の朝の作務で松葉と霜と一緒に掃きだされたというリアリティー
が票を集めました。

(客) 階段を昇り尽して初日の出 金子おくに
「初日の出」お正月の本命です。
中七の「昇り尽して」で評が分かれました。
実際に作者が経験された写真句ではないか、これまでの人生を振り返っての
心象風景をこの句に託したものではないかなどなどです。
ご本人に聞いてみたいと思います。

西東京稲門会俳句サロン(第八十一回)

平成二十八年十二月九日

兼題 忘年会 酉の市 ほか

今は昔子等の寝姿クリスマス

花子亡き象舎に献花年惜む

真綿めく雲を被きて山眠る

瀬戸内はすべて日溜り小春風

売場にて頬に指当つ歳暮かな

ケセラセラ安堵のふりで日向ぼこ

押し合ひて上に掲げる熊手かな

酉の市一千両の綱踊る

酉の市世界平和も搔き抱け

鎌倉に尼寺一つ石路の花

雪晴の富士に影濃きひとところ

初雪や黎明の空明けやらず

巡礼の歩む影あり枯野道

冬半月風吹き荒れる濁世かな

はにかむや小さき熊手の大手締

手拍子に棟梁両手熊手揚げ

次回

一月十三日(金) 十四時 障害者総合支援センター「フレンド」

兼題 新年一切 寒卯 ほか計五句

小滝條路

松尾良久

高杉風至

松谷富彦

石井三舟

金子まさお

藤田貞夫

金子おくに

高橋 薫

河村洋子

滑志田流牧

志賀 勉

渡辺千恵

木下石路

小嶋長閑

梶原松葉

「今月の特選句」

(天) 花子亡き象舎に献花年惜む

松尾 良久

十二月に久しぶりに井の頭動物園に足を運んでの一句。忘年会という兼題が平凡すぎてなかなか一句が出来なかつたのが「年惜しむ」を使ったことでみなさんの一票が集まったということでした。

(地) はにかむや小さき熊手の大手締

小嶋 長閑

西の市での光景をゆるりもあたつぷりに観察しています。
大きな熊手は誇らしげに担いでいますが、小さな熊手はなんとなく肩身が狭い。
しかしその熊手を求めた客に祝儀の手締めが高く響いてはにかんだ人のすがた
が浮かんできます。

(人) 瀬戸内はすべて日溜り小春風

松谷富彦

瀬戸内は作者が四国で勤務された思い出の場所での長い歴史を秘めた
瀬戸内海の大景を小春風という季題とすべて日溜りという表現でみごとに
表現されています。
俳句は季語の使い方というお手本のような一句。

以上

西東京稲門会俳句サロン(第八十回)
平成二十八年十一月十一日(金)
兼題 炭一切 神無月 ほか五句

古民家の縁側温し帰り花

金子まさお

庫裡の炉に十能斜め冬隣

松尾良久

神の留守天神の矮鶏静かなり

藤田貞夫

我が靴の音よりはなし冬木立

○石井三舟

きびきびと荒縄使ひ冬構

松谷富彦

宝物に風の息吹や秋気澄む

小嶋長閑

芒原枯れて風神風を駆る

高杉風至

切通し抜けて一株石露の花

滑志田流牧

檀家より小菊山ほど報恩忌

渡辺千恵

山紅葉坂東武者の駆けし道

志賀 勉

叫ぶ夫ムンクの夢か神無月

金子おくに

百歳をとにかく生きて神の旅

木下石蔭

朽ち果てし炭焼窯の森昏し

高橋 薫

埋火に今日の炭足し恙なき

◎梶原松葉

今は夢炭つぐ所作の白き腕

○小滝條路

次回 十二月九日(金)会場 障害者支援センター
兼題 忘年会 酉の市 ほか計五句

「今月の特選句と添削句」

(天)埋火に今日の炭足し恙なき

梶原松葉

昨今、その姿を見ることのない炭。作者は薪炭のあつた時代を回想して一句に仕立てました。
中五の「今日の炭」と下七の「恙なき」が照応して作者の感慨が伝わってきます。

(地)我が靴の音よりはなし冬木立

石井三舟

冬木立の冴え切った空気を「音よりは無し」と簡潔に靴のさまでまとめられました。

(人)今は夢炭つぐ所作の白き腕 小滝條路

妙齡のご婦人の炭をつぐしぐさを艶の一句にまとめられました。上五の「今は夢」という表現が妙です。季語の炭が生きていると感じました。

添削句

檀家より山ほど小菊報恩忌 渡辺千恵

作者は浄土真宗のお寺の奥様です。報恩忌は親鸞上人の忌日。この日の前後七昼夜にわたり修する法要が報恩講です。奥美濃のお寺に嫁がれた方ですが当俳句サロンの投句会員です。

以上

西東京稲門会俳句サロン(第七十九回)
平成二十八年十月十四日
兼題 紅葉 身に入む

紅葉寺また紅葉寺京の旅 小滝條路

城史説く人の足元木の実落つ ○ 松尾良久

秋風や干魚の目より塩がふく 高杉風至

鈴の音のすがしき響き秋遍路 ○ 松谷富彦

寂しさも運び来たるや金木犀 石井三舟

木洩日に透けて奥山初紅葉

小嶋長閑

信濃路や稲架に浅間の見え隠れ

○ 金子まさお

身に入むや相続の地に売家建て

梶原松葉

身に入むや老いのハンドルゆるく切り

藤田貞夫

数えつつ七つ目佳き香藤袴

金子おくに

鷹柱渡りの力みなぎらせ

高橋 薫

身に入むや参る人なき十字墓

河村洋子

掌にいそがぬ旅のひよんの笛

滑志田流牧

機関車の煙平らに溪紅葉

◎ 志賀 勉

音もなく紅葉散り敷くけふも雨

木下石蔭

芋煮会寺の鍋貸す河原かな

渡辺千恵

次回 十一月十一日(金)十四時 障害者支援センターフレンドリー
兼題 神の旅 炭一切 ほか計五句

「今月の特選句と添削句」

(天) 機関車の煙平らに溪紅葉

志賀 勉

「紅葉」が季題。SLの煙が紅葉の溪を平らに流れるさまの写生句です。

(地) 鈴の音のすがしき響き秋遍路

松谷富彦

四国八十八か所の巡礼、秋巡礼は四季のなかでは一番人気のようです。
巡礼の鈴の音が聞こえてくるような一句です。

(地) 信濃路や稲架に浅間の見え隠れ

金子まさお

真田丸バスツアーの一句。稲架とは刈り取った稲を束にして竹竿に並べ干したものです。この季語が生きています。

(人) 城史説く人の足元木の実落つ 松尾良久

上田城の見学にはボランテイアのガイドさんが案内してくれました。本丸跡には椎の実が沢山転がっていました。

(人) 秋澄みて妙義奇岩を研ぎすます 志賀 勉

長野道からは浅間。妙義がよく見えます。下五の「研ぎすます」と季語の「秋澄む」が絶妙のバランスです。

以上

西東京稲門会俳句サロン(第七十八回)
平成二十八年九月九日

兼題 鰯雲 秋桜 ほか

健気にも風雨に挑む秋桜 小滝條路

秋桜開拓村にサイロ朽つ 松尾良久

黒潮の沖へ出漁鰯雲 〇 高杉風至

汚染土の闇深くして蚯蚓鳴く ◎ 松谷富彦

秋風や白樺抜けて小海線 石井三舟

コスモスの折れて夢二の柳腰

金子まさお

赤とんぼ十万年を埋ぐむ核

梶原松葉

漁火の西へ流れる夜長かな

藤田貞夫

寅さんの往く先々に鰯雲

○ 金子おくに

遠泳や赤帽見張る艀漕ぎ舟

高橋 薫

様変りしたるふるさと鰯雲

河村洋子

水晶を擦る音のこし法師蟬

滑志田流牧

松手入れ兼六園の高梯子

志賀 勉

高麗廟にハングルの絵馬白木槿

渡辺千恵

陶工と共に拉致され曼珠沙華

木下石蔭

編笠の白きうなじや風の盆

小嶋長閑

(天) 汚染土の闇深くして蚯蚓鳴く

松谷富彦

作者は毎日新聞OB、今夏東北旅吟の作品です。

「蚯蚓鳴く」はむつかしい季語ですが、東北大震災が残した核汚染を読み込んで感銘を覚える一句となりました。

(地) 黒潮の沖へ出漁鰯雲

高杉風至

鰯雲と黒潮の取り合わせ、雄大な一句です。

なんの技巧もなく生まれたこれぞ俳句という作品です。

(地) 寅さんの往く先々に鰯雲

金子おくに

没後二十年という今夏、テレビで懐かしい寅さんと出会う

ことが、出来ました。
フーテンの寅さんもかの芭蕉のように「旅」を棲家として
人生をおくったのでしょか。
「鰯雲」という季語が生きた人事句です。

(添削句)

兼六に秋の松伐る高梯子(原句)

志賀 勉

加賀百万石の名園に敬意を表してフルネームの兼六園に。
季語の「松手入れ」を上五に置くことで発見の高梯子が
生きて、バランスの良い一句となりました。

松手入れ兼六園に高梯子(添削)

次回

十月十四日(金) 十四時より

障害者総合支援センター「フレンドリー」

兼題 紅葉 身に入む ほか計五句

西東京稲門会俳句サロン(第七十七回)

平成二十八年七月八日(金)

兼題 百日紅 炎天 ほか五句

蓮の花妍を競ふは午前中

金子まさお

武蔵野を大跨ぎして雷雨去る

松尾良久

向日葵や夕日に染まる甲斐の里

藤田貞夫

さるすべり百人番屋の大薨

河村洋子

荒南風やEU離脱電子版

石井三舟

雷鳴を雷鳴と聞く平和かな

○

松谷富彦

病床の母の気丈夫百日紅

○

小嶋長閑

炎天や火花を散らす町工場

◎

高杉風至

炎天や沈みし艦に魚影満つ

滑志田流牧

夏暖簾の金魚大きく泳ぎけり

○

渡辺千恵

薄日さす干潟に蟹の見え隠れ

志賀 勉

葭すだれ去年と同じ順に吊る

金子おくに

くちなしや小雨の中を薫り合ふ

木下石蔭

あじさいは雨から青をもらひ咲く

高橋 薫

何処辺より這い来て咲くや灸花

梶原松葉

山路来て湧水旨し炎天下

小滝條路

次回 九月九日(金) 会場未定 八月はお休み
兼題 颯雲 秋桜 ほか計五句

「今月の特選句と添削句」

(天) 炎天や火花を散らす町工場 高杉風至
下町に見られる町工場、飛び散る火花や走る湯玉、唱歌「村の鍛冶屋」の一節が思い浮かびます。炎天という季語の素直な写生句です。

(地) 雷鳴を雷鳴と聞く平和かな 松谷富彦
雷鳴を空襲や大砲の音と結びつけて感じる世代もすくなくなりました。下五の「平和」に万感の思いがこめられていると感じました。

(人) 病床の母の気丈夫百日紅 小嶋長閑
百日紅の花は個性的です。作者は亡くなった母上を思い浮かべて作られた

のでしょう。漢字の多い句のスタイルが効果的です。

(添削句) 夏暖簾金魚大きく泳ぎけり 渡辺千恵

夏暖簾に金魚大きく泳ぎけり(改)

「に」一字で金魚の様子がはっきりしました。この金魚は暖簾に描かれた金魚でした。季重なりも解消しました。

以上

西東京稲門会俳句サロン(第七十六回)

平成二十八年六月九日

兼題 麦酒 黒南風 ほか

お見合いの席を取り持つさくらんぼ 小滝條路

大利根の風を入れたる夏座敷 ○ 松尾良久

ハモニカの気安き音色風涼し 高杉風至

核廃絶願ひ寛恕の大西日 ○ 松谷富彦

黒南風や重機黙々働きぬ ◎ 石井三舟

せせらぎの闇に流るる蛍かな

小嶋長閑

護摩を焚く本堂に南風吹き入りて

金子まさお

早苗田を統べて照らへる入日かな

梶原松葉

黒南風や銚子大橋烟りをり

藤田貞夫

マニキュアの指でしつかり大ジョッキ

金子おくに

新樹光被爆者オバマ抱擁す

高橋 薫

薄暑光童話の町の迷路めく

河村洋子

並みよろふ山に雪形つばくらめ

滑志田流牧

雨蛙水車の蔭に休みをり

志賀 勉

黒南風や若冲描く天井画

木下石蔭

坊守を見送る山路落し文

渡辺千恵

「今月の特選句と添削句」

(天)

黒南風や重機黙々働きぬ

石井三舟

今月は同じ作者の次の句も5点句となりました。

太公望脇に一本缶ビール

ダブルクラウンというのは本当に珍しい出来事でした。

(地)

核廃絶願ひ寛恕の大西日

松谷富彦

伊勢志摩サミットの後には広島を訪ねたオバマ大統領の時事俳句です。
西日に苦心の跡が偲ばれます。

(人)

大利根の風を入れたる夏座敷

松尾良久

「利根の川風たもとに入れて」平凡の強みの一句です。

せせらぎの闇に流れる蛍かな（源句）

小嶋長閑

せせらぎの闇に流るる蛍かな（添削）

流れると流るるは口語と文語の違いです。俳句の叙法は文語を原則にしています。「流るる」となると全体のリズムがまるやかにになりました。

以上

次回 七月八日（金）十四時 田無おあしすです

兼題 炎天 百日紅 ほか計五句

西東京稲門会俳句サロン（第七十五回）

平成二十八年五月十三日

兼題 新茶 薄暑 ほか

乙女らの素足煌めき街薄暑

小滝條路

千年の幹より伸びて神の藤

松尾良久

余花いまだ耳ひらひらと老いし象

○ 高杉風至

一瞬の匂を封切る新茶かな

○ 松谷富彦

春キヤベツすつと刃がとおりけり

石井三舟

弁当に藤の花房届きそう

○ 金子まさお

万歩計千歩増やして薄暑かな

梶原松葉

新茶買ふ幟の高き老舗より

藤田貞夫

羊羹は薄切でよし新茶汲む

金子おくに

畝の波新茶の旗の賑わいて

高橋 薫

木の精の弾み出でくる五月かな

河村洋子

大川を漕いで立夏の青き波

滑志田流牧

陽の落ちて濁り澄みたり代田水

◎ 志賀 勉

牡丹咲いて庫裡に唐獅子屏風立つ

渡辺千恵

つかの間のダンス終わりし薄暑かな

木下石蔭

怒気満ちて仁王踏ん張る夕立雲

小嶋長閑

次回 六月十日(金)十四時 田無おあしす
兼題 黒南風 麦酒 ほか計五句
今月の特選句

天 一瞬の旬を封切る新茶かな

富彦

上五の「一瞬の旬」という表現に票が集中、リズム感があり
「新茶」の季感にぴったりはまりました。

地 弁当に藤の花房届きそう

まさお

なんでもない会話の一語が俳句になりました。

藤は作ってみるとなかなかむつかしい季語です。

人 余花いまだ耳ひらひらと老いし象 風至

井の頭動物園の「花子」を思い浮かべました。

「余花」という季語が生きています。

添削句

墨江を漕いで立夏の青き波（源句）

大川を漕いで立夏の青き波（添削）

隅田川の雅語である墨江に質問が出ました。「大川」もどうかという声もありましたが出来るだけわかりやすくということ、「大川」に。

以上

西東京稲門会俳句サロン(第七十四回)

平成二十八年四月八日(金)

兼題 花一切 仏生会 ほか五句

灌仏会異教地の乱鎮まれと

金子まさお

二胡奏づ日中友好花の宴

松尾良久

吉野建窓一面の花吹雪

藤田貞夫

宇宙への旅に応募す四月馬鹿

河村洋子

開花をば早め媚び売る姥桜

小滝條路

退職や花束抱え桜道

石井三舟

同じ雲田毎に映し風光る

◎ 松谷富彦

緊張の校門くぐる初桜

小嶋長閑

つけられし名にまだ慣れぬ仔猫かな

高杉風至

落花みな海を指せり信濃川

○ 滑志田流牧

果樹園に授粉の梯子日の永し

渡辺千恵

園児らの柄杓ぶつかり花御堂

○ 志賀 勉

たんぽぽや願ひ携え善光寺

金子おくに

廃校の桜今年も麗しく

木下石蔭

花の降る千鳥が淵に君といし

高橋 薫

児等帰り路地の白蓮花明かり

梶原松葉

次回

五月十三日(金) 十四時 田無おあしす

兼題 薄暑 新茶 ほか 計五句

今月の特選句と添削句

・ 同じ雲田毎に映し風光る

富彦

信濃姥捨の「田毎の月」を連想する棚田の景、一つ一つの田におなじ雲がうつっているよという発見。季語の「風光る」がぴったりはまりました。

・ 落花みな海を指せり信濃川

流牧

スケールの大きな一句。大河信濃川に合流して海を目指す櫻花の旅、中七句で決まり。

園児らの柄杓ぶつかり花御堂

勉

四月八日はお釈迦様の誕生日。花御堂に甘茶を注ぐ園児らの柄杓がぶつかったことを発見した作者。なんでもないしぐさが一句になりました。

・花の降る千鳥が淵に君といて

薫 (原句)

・花の降る千鳥ヶ淵に君といし

(添削)

末尾の「いて」と「いし」たった一字の違いですが俳句は原則文語体で作るという決め事があります。全体のリズムも変わってきます。

以上

西東京稲門会俳句サロンアーカイブ

西東京稲門会俳句サロン(第七十三回)

平成二十八年三月十一日(金)

兼題 ほか五句

埒から少し隔てて揚雲雀

金子まさお

摘みもどる山の幸あり春スキー

松尾良久

雲雀野や堤に並ぶ太公望

藤田貞夫

黒焦げの薄きトースト受難節

河村洋子

揚雲雀寅さん居そうな河の土手

小滝條路

卒業や見送りもなく下り線

石井三舟

春の田をドミノ倒しに水走る

松谷富彦

導火線湿りたるまま卒業す

石井唯夫

顔一面口開けねだる雲雀籠

小嶋長閑

モーツァルト聴くため地虫穴を出づ

木下石路

釣人は日向にばかり猫柳

◎

高杉風至

制服のきゆうくつになり卒業す

梶原松葉

啓蟄の土運びをる杖の先

○

滑志田流牧

花ミモザ石堀高く修道院

○

志賀 勉

誰よりも幼き顔で卒業す

金子おくに

合格子漕ぐ自転車の軽さかな

渡辺千恵

目はどこに園児の作る内裏びな

高橋 薫

今月の特選句と添削句

釣人は日向にばかり猫柳

風至

中七の「日向ばかりに」に作者の小さな驚きがあります。だれもが見る風景の中からの一句です。

花ミモザ石堀高く修道院

勉

修道院の高い石堀という舞台に鮮やかなミモザの黄色が浮かんできます。

啓蟄の土運びをる杖の先

流牧

啓蟄は二十四節季の一つ、虫たちが一斉に穴から出て来るユーモラスな

気分もある季語で土と杖を持ってきた作者は登山の杖をいめーじしたとのことでした。

添削句

制服の丈も短く卒業す (原)

松葉

制服のきゆうくつになり卒業す (改)

受験子の晴れて乗り行く自転車かな (原)

千恵

合格子漕ぐ自転車の軽さかな(改)

次回 四月八日(金) 田無おあしす
兼題 花一切 佛生会 ほか

計五句

西東京稲門会俳句サロン(第七十二回)
平成二十八年二月十二日
兼題 春時雨 針供養 ほか

農夫らは野焼がてらに旅談義

小滝條路

豆まろぶ鎮守の土俵節分会

松尾良久

豊屋の後継ぎ父と針供養

○ 高杉風至

瀬の音に口ついて出る早春譜

松谷富彦

薄氷や落葉閉じ込めたゆたへり

石井三舟

合否待つ心揺れたり春時雨

小嶋長閑

春時雨烟る疎林に佇みて

金子まさお

折れ針の豆腐に深く供養かな

○ 梶原松葉

雪折のモノクロの音届きけり

石井唯夫

釣り針にへら浮子添へて針供養

藤田貞夫

幕下りてなほ吉右衛門春の雨

○ 金子おくに

地の力ためて一年露の臺

◎ 高橋 薫

路地裏に残る検番春しぐれ

○ 河村洋子

ダウインチの母子像の絵踏む悪しき夢

滑志田流牧

老梅の瘦身なれど盛んなり

志賀 勉

通り雨のこりの雪をとかしをり

木下石蔭

貝雛祖母の箆笥に飾りけり

渡辺千恵

「今月の特選句と添削句」

・地の力ためて一年露の臺

薫

一読早春の野に先がける露の臺の姿が目には浮かびます。
上五、中五が句のスケールを大きくしています。

・折れ針の豆腐に深く供養かな

松葉

針供養という季語を実感できる世代も少なくなりました。
豆腐やこんにやくに用済みの針を刺して供養をするという
美しい風習を懐かしむ気持が伝わってきます。

・幕下りてなほ吉右衛門春の雨　　おくに

播磨屋の登場です。春の雨が効いています。

・豊屋の後継ぎ父と針供養　　風至

ベテランの一句、下町の一景、新派の舞台を見ているような
味わいがあります。

・路地裏に残る検番春しぐれ　　洋子

人力車に乗ってお座敷へ芸者さんが出かける、なまめかしい
風景。春しぐれで決まりというところでは。

・老梅や幹瘦せなんとも盛んなり（原句）

・老梅の瘦身なれど盛んなり　（添削）　　勉

以上

次回　三月十一日（金）十四時　田無おあしす

兼題　卒業　雲雀　ほか計五句

西東京稲門会俳句サロン（第七十二回）

平成二十八年一月八日（金）

兼題　人日　淑気　ほか五句

去年今年兵馬備立つ二千年　　○　金子まさお

舞殿に申の一字や初詣　　松尾良久

人日に浮きを見つめて日もすがら　　藤田貞夫

石庭の筋目くつきり淑気かな　　◎　河村洋子

初旅は坂の上まで酒屋まで　　三枝　博

淑氣満つ土俵に期する次の場所

小滝條路

窓越しの紅富士に淑氣満つ

石井三舟

塗り碗の卓に並びし淑氣かな

松谷富彦

風花の光を残し消えにけり

石井唯夫

曇るるや胸にぬるめの聴診器

小嶋長閑

余病ひそむ五臓六腑や七日粥

高杉風至

ひた走る青年の眸や初御空

○ 滑志田流牧

冬うらら猫に定席ゆづりけり

渡辺千恵

孫の数柚子浮き沈む湯舟かな

志賀 勉

今朝の春樟脳の香や羽織着て

金子おくに

人日や芹や薺を取り揃へ

木下石蔭

日記買ふ白き未来の頁繰る

高橋 薫

今月の特選句と添削句

石庭の筋目くつきり淑氣かな

洋子

京都の竜安寺あたりの光景が思い浮かびます。淑氣が季語ですが「新春の瑞祥の気のただようこと」と歳時記にあります。筋目くつきりと具体的な中七の写生が効いています。

去年今年兵馬備立つ二千年

まさお

作者は上野の国立博物館で実物を見て作ったそうです。去年今年の季語を目の前に立っている兵馬備と永久の時間軸で結んだ一句と言えましよう。

ひた走る青年の眸や初御空

流牧

箱根駅伝の景を思い浮かべました。初御空の季語をもってきたのでスケールの大きい一句になりました。眸の一語が効いています。

孫の数柚子の浮かびし冬至風呂

勉

孫の数柚子浮き沈む湯舟かな

(添削)

読者でこの添削の意味を考えてみてください。季重なりです。

日記買う白き未来の頁をめくる

薫

着想は素晴らしい。五七五の定型に直すと

日記買う白き未来の頁繰る

(添削)

以上

次回 二月十二日(金) 田無おあしす

兼題 春しぐれ 針供養 ほか 計五句

西東京稲門会俳句サロン(第七十回)

平成二十七年十二月はさむ月十一日(金)

兼題 短日 綿虫 ほか五句

妻は留守軒にふんわり雪婆

金子まさお

冬うらら炭焼く煙真直ぐに

松尾良久

短日や山の湯からの町明り

藤田貞夫

梵鐘の余韻の中へ雪蛩

河村洋子

北風荒び秩父山稜晴れ渡る

三枝 博

枯葉舞ふ静かに逝きし大女優

小滝條路

短日やゴジラ暮れ行く歌舞伎町

石井三舟

一つずつ席を譲っておでん酒

松谷富彦

綿虫や残りの命慈しむ

石井唯夫

地をめがけ錐揉み落ちる枯葉かな

小嶋長閑

綿虫や欠札葉書届きました

木下石蔭

手のひらを返し綿虫放ちやる

高杉風至

綿虫や針穴ほどの染み残し

梶原松葉

高鳴れる鎮魂のチェロ冬怒濤

滑志田流牧

踏み迷う雑木林の落葉道

志賀 勉

短日や紅葉挟んで読み残し

金子おくに

西東京稲門会俳句サロン(第六十九回)
平成二十七年十一月十三日

兼題 石蔭の花

石蔭や里の手水場ありにけり

小滝條路

残菊の色寄せ合ふて括らるる

松尾良久

住みつきて安らぐ庭や石蔭の花

高杉風至

朝市のお婆たくまし能登晚秋

松谷富彦

二人居て話もなくて石蔭の花

石井三舟

枯葉踏む人それぞれの時の音

小嶋長閑

冬の蠅日当りの良き文学碑

金子まさお

夫婦箸一膳となり秋深む

梶原松葉

妻の掌の暖かきかな冬すみれ

石井唯夫

蔵街に鐘の音流れ冬に入る

三枝 博

黄八丈織場の庭に石露の花

藤田貞夫

泥葱を上げば象牙の色現るる

金子おくに

長漕の舟べり速し紅葉かな

高橋 薫

石にゐて冬の蠟螂空を嘯む

滑志田流牧

物売りの声塀の外石露の花

志賀 勉

年回忌寺の廊下の冷たかり

木下石露

懸崖の菊競ひ合ふ寺の庭

一丸水仙

西東京稲門会俳句サロン(第六十八回)
平成二十七年十月九日(金)
兼題 秋深し ほか

お向かいは酒宴なるらし十三夜

小滝條路

乗越を礫のごとく鳥渡る

松尾良久

客を待つ馬と目の合ふ愁思かな

高杉風至

道問はれ木犀の香で教へけり

松谷富彦

踏切のシグナル遠く秋深し

石井三舟

一つ又色になりけり式部の実

小嶋長閑

稲穂垂れ高志の教え身に染まず

金子まさお

冷まじや尋ねし友の転居札

石井唯夫

二つ三つ呵々大笑の石榴かな

三枝 博

月陰り棄老伝説ありし村

藤田貞夫

露寒やまるまる猫を膝に抱く

渡辺千恵

大いなる黄金の月秋闌ける

滑志田流牧

流木の白き河原や野分晴

志賀 勉

つぎつぎと雲流れ行く秋出水

木下石蔭

酔芙蓉ほほ赤らめる宵の口

一丸水仙

西東京稲門会俳句サロン(第六十七回)
平成二十七年九月十一日(金)
兼題 萩 ほか五句

あの人も吾も連れなしこぼれ萩

金子まさお

つぶやきのやがて高音に法師蟬

松尾良久

荒屋の庭をステージちちろ鳴く

藤田貞夫

萩あまた仏あまたの古利かな

河村洋子

萩咲けば紫の波風まかせ

三枝 博

お喋りもとつぜん途絶へ西瓜出る

小滝條路

駅までの道を曲がれば萩の庭

石井三舟

夕映へに影絵となりて秋遍路

松谷富彦

本堂へ細道つくるこぼれ萩

石井唯夫

海の色焦げてじゅうじゅう秋刀魚焼く

小嶋長閑

戦争の童話八月十五日

木下石路

白萩の暮れ残りゐて白深む

高杉風至

薄衣帯ぎゅつと締め喪主となる

梶原松葉

唐黍を剥くやどこまで空の青

滑志田流牧

月見豆いくたび空けし大ジヨッキ

渡辺千恵

野馬追や疾駆の武者の汗しぶき

志賀 勉

稲妻に秋明菊のほの白し

一丸水仙(和子)

西東京稲門会俳句サロン(第六十六回)
平成二十七年七月十日 兼題 夕立

夕立や屋号太ぶと宿の傘

梶原松葉

そつと避け雨の歩道の蝸牛

志賀 勉

鮎釣の笠三角に暮れ残る

渡邊千恵

献杯で始まる会や梅雨寒し

河村洋子

茅の輪より登る富士塚ただちにも

松尾良久

大夕立駆け込む路地の縄のれん

小嶋長閑

黒揚羽一回りして藪の中

石井三舟

夕立のほこり臭さや遊園地

石井唯夫

傘すばめ道ゆづり合ふ梅雨の路地

高杉風至

鳴き声の闇深くする青葉木菟

松谷富彦

夕立や蹴られしボウル草むらに

金子まさお

同窓の小さき旅や明易し

小滝條路

鯉の背を過ぐる夕立栃木宿

滑志田流牧

沖繩や向日葵の花高くあり

木下石蓀

片陰を肩組みながら下校の子

三枝 博

椰子の実の離るる海辺夏の月

高橋 薫

梅干して老婆波打つ皮膚の皺

藤田貞夫

時計草閨一秒構ひなく

金子おくに

西東京稲門会俳句サロン(第六十五回)

平成二十七年六月十二日

兼題 噴水ほか

噴水の飛沫に火照り鎮めけり

小滝條路

ゴールデンバット墓前に置かれ桜桃忌

松尾良久

蛍火やひとりの旅寝深からず

高杉風至

ブラウスの胸尖らせて夏来る

松谷富彦

居酒屋の親父無口に胡瓜もみ

石井三舟

濃紫陽花抜けて読経の夕間暮れ

小嶋長閑

噴水の止まりて子等の静まりて

金子まさお

峠道ま近に大き朴の花

梶原松葉

水音の近くなりけり草いきれ

石井唯夫

噴水の虹に見とれて小半時

三枝 博

噴水を囲む旅人多国籍

藤田貞夫

直筆のアンネの日記白薔薇

河村洋子

白き花山里静か梅雨に入る

金子おくに

麦秋や真一文字にローカル線

渡辺千恵

両の手に蛍をつつみ光り透け

高橋 薫

噴水に乗りたる雲の昼寝かな

滑志田流牧

噴煙の溪若葉まで及びけり

志賀 勉

十葉や写経の墨の色は濃く

木下石蔭

西東京稲門会俳句サロン(第六十四回)

平成二十七年五月九日

兼題 筧 ほか計五句

麦秋や今も脳裏に原節子

小滝條路

安曇野の雪嶺を縫ひ鳥帰る

松尾良久

釣り銭に土ついてをり植木市

高杉風至

牡丹咲くその大輪に疲れけり

松谷富彦

園児らの声がこだます五月晴

石井三舟

背丈ほどな竹の子四五本暗き径

木下石蔭

薄味の奥の深さや納涼川床

小嶋長閑

登り来て若葉の中に三角点

金子まさお

海遠く蜜柑の花の香の流る

梶原松葉

微笑みの赤子の寝顔新樹光

石井唯夫

泥付きの孟宗竹の面構へ

三枝 博

たかなも由緒正しき長岡京

河村洋子

初つばめ縄文遺跡に飛びかひて

金子おくに

堂縁に鋏痕しるき筍転ぶ

渡辺千恵

風みどりものみな光る五月晴

高橋 薫

黒土の匂ふにまかす筍掘

滑志田流牧

土破り筍朝の露を浴ぶ

志賀 勉

西東京稲門会俳句サロン(第六十三回)
平成二十七年四月十日(金)
兼題 春昼

外濠の桜見ゆるもいくたびか

高橋 薫

青錆びし明治の午砲や花の昼

松尾良久

晩春や八十路の爺の耕運機

藤田貞夫

初蝶や色とりどりのランドセル

河村洋子

春風の老猫のたり廊渡る

三枝 博

一句さへ詠めず呻吟山笑ふ

小滝條路

菜の花や揺れて子供のかくれんぼ

石井三舟

花冷や車座の輪の縮みたり

松谷富彦

花筏出会いと別れ縞模様

金子まさお

気の抜けた鳥の声や春の昼

石井唯夫

いくさ場の堀にたゆたふ花筏

小嶋長閑

百千鳥花から花へはやすなり

木下石蔭

老いて尚ときめきのあり初燕

高杉風至

爪の間に染みの残りてよもぎ餅

梶原松葉

きじばとの隔りにゐて花の冷え

滑志田流牧

風吹きて辛夷一片地にまろぶ

渡辺千恵

鯉の背に運ばれてをり花筏

志賀 勉

西東京稲門会俳句サロン(第六十二回)
平成二十七年三月十三日(金)
兼題 雛一切 春雨

流し雛その行く先に幸あれと

高橋 薫

春眠をたつぷり乗せて山手線

松尾良久

鳩の湖春雨けぶり舳い舟

藤田貞夫

春の水龍太の郷の川と谷

河村洋子

啓蟄やみみずころがす子猫かな

三枝 博

菜の花や速度を落とす路線バス

小滝條路

まんさくや寝癖残して花開く

松谷富彦

日をほどこき街の櫂の芽吹くかな

石井唯夫

雁風呂や友の愛せし応援歌

小嶋長閑

掌にのせし鶏卵大き春の雨

木下石蔭

鳥引くや多摩川はまた風の道

高杉風至

はこべらの根の引き易く雨あがる

梶原松葉

紅花の舟にて辿る雛の道

滑志田流牧

幼子のはなやぐ別れ流し

渡辺千恵

用達にふた往復の春日かな

金子おくに

雛あられ食べていいかと問ふ子かな

石井三舟

甲羅干し春の水面に親子亀

志賀 勉

ぼんぼりの灯に雛の頬ぬくもりて

金子まさお

西東京稲門会俳句サロン(第六十一回)

平成二十七年二月十三日

兼題 冴返る 犬ふぐり

あるだけの靴を磨きて春を待つ

小滝條路

冴え返る人力車には緋の毛布

松尾良久

薄氷の小流れ跳ぶ子跳ばざる子

高杉風至

冴え返る夜道に響く女靴

松谷富彦

列車去り雪の乱舞が残りけり

石井三舟

青銅器の甲骨文字や冴返る

木下石蔭

梅白し無垢の時代を思い出す

小嶋長閑

冴え返る我を見下ろす閻魔の目

金子まさお

一服の眼先にあり犬ふぐり

梶原松葉

休耕田瑠璃の島なす犬ふぐり

石井唯夫

先がけて一隅照らす犬ふぐり

三枝 博

露の薑月山に向け顔を出す

藤田貞夫

尖る風まろみ始めて寒明くる

河村洋子

空に海安房は群青冴え返る

金子おくに

生かされて生き抜く一日寒茜

渡辺千恵

枝打ちの響き鋭く冬木立

高橋 薫

安吾忌や痴呆のごとく空を見る

滑志田流牧

西東京稲門会俳句サロン(第六十回)
平成二十七年一月九日(金)
兼題 新年一切 探梅

静かなり湯船に透ける除夜の鐘

高橋 薫

十字路に風を読みつつ梅探る

松尾良久

子供らで励まし搗きし鏡餅

藤田貞夫

小さき手のもてあましたる雑煮箸

河村洋子

探梅や旧知の友を訪ふ気分

三枝 博

御利益は何より平和初詣

小滝條路

お年玉一つ増えたる今年かな

石井三舟

補聴器をとればこつくり日向ぼこ

松谷富彦

新暦ふと誕生日確かめる

金子まさお

探梅や奥社の見ゆるところまで

石井唯夫

沿え書のくせ字に安堵老の春

小嶋長閑

読み初はローマの人の物語

木下石蔭

武蔵野に齢を重ね七日粥

高杉風至

巻き髭のよき睨み顔だるま市

梶原松葉

探梅の径闇に入り香ほのか

滑志田流牧

天神の崖の細道梅探る

渡辺千恵